慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	何之瑜晩年の二つのこと
Sub Title	The meaning of He Zhiyu's (何之瑜) two significant actions in his later years
Author	陳, 道同(Chen, Daotong) 長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.9 (2016.) ,p.121- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20160331-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

何之瑜晩年の二つのこと

陳　道同著
長堀祐造訳

【訳者はしがき】追悼陳道同、そして何之瑜のこと[1]

一、陳道同その人と訳者との交流

本編の著者、陳道同（一九二七～二〇一四）は、魯迅作とされてきた「トロツキー派に答える手紙」発表のきっかけを作る書信を魯迅に出した中国トロツキー派指導者の一人、陳仲山（其昌）の長男である。陳仲山及び「トロツキー派に答える手紙」問題については拙著『魯迅とトロツキー』（平凡社、二〇一一年）や、本紀要第一号（二

〇〇八年）掲載の拙訳「魯迅の書信から陳其昌その人を語る」の「訳者解題」を参照願うこととし、ここではまずは陳道同の略歴を訳者が直接本人から入手した自筆メモによって紹介する（拙訳）。

陳道同

一九二七年五月　北京に生れる。

一九二九年初、母に従って上海に移る。

一九三七年抗戦前、一家は上海江湾郷村に引っ越す。

一九四三年九月～一九四七年九月　銭荘[2]に勤務。

一九四七年九月～一九四九年九月　映画会社営業部に勤務。この時期、夜は東呉大学[3]法律系第一、二学年に学ぶ。

一九四九年九月～一九五一年七月　北京大学法律系第三、四学年に学ぶ。

一九五一年七月～一九五二年十二月　中国人民大学法律系大学院生。

一九五八年五月～一九八八年末　建築工事会社で働き、定年退職を迎える。[4]

訳者の陳道同に対するインタビューや最近の資料[5]によって、この略歴を補足しておきたい。一九二九年から、一九四九年秋の北京大学入学までの陳道同は上海在住、在勤である。【本編】にもあるとおり、映画会社とは文華映画会社（文華影片公司[6]）のこと。略歴には一九五二年から一九五八年についての記載はないが、この間、陳道同は中共政権下のトロツキスト一斉摘発で、一九五二年冬に逮捕され、四年の徒刑判決を受け、労働改造を強いられた（逮捕から数えれば五年以上、自由を奪われたことになる）。

中国トロツキー派指導者の一人であった父・陳其昌は一九四二年六月、幼い陳道同の目前で日本軍の憲兵隊によって逮捕され、九月頃、秘密裏に処刑されたが、陳道同も十九歳にして、トロツキストとなる。しかし、中共勝利の情勢を目前にして、中国トロツキー派の政治路線が敗北したと実感した陳道同は、中国トロツキー派指導者で父の同志鄭超麟からトロツキー派離脱の文書を得て、中共側に身を投じたという。[7] その結果、陳道同には北京大学そして中国人民大学大学院進学の道が開かれた。しかし、一九五二年十二月、中共政権は大陸のトロツキスト一斉逮捕に踏み切り、数百人がトロツキストと認定され、反革命罪で有罪とされた際に、陳道同もトロツキー派とは組織的には一線を画していたにもかかわらず、トロツキストと認定されてしまったのである。刑期を終えたトロツキストたちは、苦難の人生を強いられたが、陳道同も例外ではなく、北京大学、人民大学大学院で学んだインテリの通例からは外れ、ホワイトカラーの職は与えられず、現業労働者として定年まで働いた。元トロツキストたちには改革・開放期まで昇給の機会すらなかったという。[8]

定年後の陳道同は、父、陳其昌や陳独秀、中国トロツキー派の研究に傾注した。そして、「孝子」に恵まれ、上海で平穏な晩年を送ったが、二〇一四年五月四日、八十四年にわたる波乱の生涯を閉じた。夫人の葉琴娣（一九二八～）は健在である（【本編】は陳道同・葉琴娣夫妻の長子、陳躍宇氏の同意を得てここに訳出、掲載する）。

ついで、訳者と陳道同との交流と本稿入手の経緯について記す。陳道同の存在を知ったのは、一九九七年に訳者と英国リーズ在住の中国トロツキー派指導者の一人、王凡西との通信が可能となり、「トロツキー派に答える手紙」問題を調べていた訳者が陳其昌の正確な生没年を王老に尋ねた過程でのことである。直接、陳道同と連絡をとりたいという訳者の希望を、王老は上海在住の鄭超麟を経由して陳道同に伝えてくれた。鄭老は中国トロツキー派を代表する指導者の一人で、二十七年間、政治犯として毛沢東の獄で過ごし、鄧小平時代にやっと自由を得て上海

市政協委員となっていた。しかし、トロツキー派問題で辛酸を舐めた陳道同は外国人研究者との接触を容易に同意できる心境ではなかった。父は日本軍に殺されたのであり、中国トロツキー派は日本から資金援助を受けた「漢奸」だとされてきたのだから、日本の研究者との接触は避けたいという心情は容易に理解できた。その後、訳者は一九九九年広州で開かれた陳独秀学会に出席した際、温州から参加していた二人の老トロツキスト、陳良初、陳鏡林の知遇を得た。なんと北京大学学生時代にトロツキスト・パージで逮捕された陳鏡林は、一九五〇年代、同じ労働キャンプで陳道同と知り合っていたという。翌二〇〇〇年度、訳者が慶應義塾大学との協定で北京大学に訪問研究者として滞在した際、この二人の老トロツキストを北京大学に招いて、長時間にわたるインタビューを行ない、のちにこれを後掲注（5）に記した「中国トロツキストの命運―人民共和国に暮らして―」（『中国21』第十四号）に掲載したわけだが（二人の名前は当時の状況を考慮して変名とした）、温州に帰郷する両氏が上海に立ち寄るというので、訳者が北京大学檔案館で発見した学籍簿や同窓会名簿、さらには魯迅博物館で撮影した陳其昌の魯迅宛の第二信（注（5）の拙著『魯迅とトロツキー』二一〇頁参照）全頁の写真などの陳其昌関連資料を陳道同に届けてくれるよう依頼した。中共政権で政治的圧迫を受けた人々はそれぞれの事件、グループごとに互助的連携が存在するが、中国トロツキー派の人々の間にもそうした絆があったようだ。その結果、陳道同から北京大学宿舎の訳者宛に書信が届き、ようやくにして通信が始まったのである。陳道同が言うに、自分も北京大学在学時代、父の資料を探して大学図書館などを探したが、当時は未整理状態で何も見つからず、訳者発見の資料で初めてわかったこともあり、魯迅宛書信の写真も父の筆跡が家に残っていないので貴重だ、ということだった。

そして、父、陳其昌の死についての文章も訳者に送ってくれたが、それは陳其昌が日本軍に連行された際の陳道同の目撃証言や、陳其昌と晩年の陳独秀の交流にもふれる貴重な資料だったので、訳者は魯迅博物館副館長の陳漱

渝に紹介し、その結果『魯迅研究月刊』二〇〇一年第四期がこれを掲載した。王凡西、鄭超麟ら指導者以外の市井の中国トロツキー派当事者の文章がこうした権威ある刊行物に載るのは珍しいことである。訳者はこの文章を翌年四月、『中国研究月報』二〇〇二年四月号に訳載し、その掲載誌を届けるため、上海の陳道同宅を五月に訪ね、初めての会見が実現したのであった。そこで、改めて陳道同の経歴について質問したのだが、その際、何之瑜のことが話題となった。「君は何之瑜を知っているか」と聞かれた訳者は、当時すでに鄭超麟の「記何資深」や何之瑜の陳独秀に関する文章を読んでいたので、「何資深のことですね」ととっさに答えることができた。「知らない」と答えたら、話はそこで終っていたかも知れない。予習は大事だ。陳道同は、自分は抗日戦後、何之瑜と一緒に住んでいたと言い、未刊行の【本編】コピーを訳者に提供してくれたのである。陳道同は、この文章は王老などからは公表しない方がいいと勧告されていると訳者に言った。何故かは後掲本文をお読みいただければわかるが、【本編】には何之瑜を再評価しようという意図が明白である。鄭超麟の「記何資深」は、何之瑜の晩年の陳独秀援助や遺稿出版に関する件では何之瑜を評価し、実際この件では鄭超麟も何之瑜に協力したのであるが、二人は三度も絶交するほど、個人的にはそりが合わなかったのである。そこで、【本編】は鄭超麟に対する反論という意味をもつことにもなる。鄭超麟は本編執筆時にはすでに鬼籍に入っていたが、盟友、王凡西は鄭老への配慮もあってなお公表を控えるよう勧告したのだろう（【本編】は一部、王老自身への反論という側面もあるのだが）。人民共和国成立前夜に組織方針で国外に出た王凡西には、「ペテロ的精神」で大陸に残り、二十七年間、毛沢東の獄で過ごすこととなった鄭超麟に対して、遠慮や後ろめたさがあったように訳者には思える。だが、本稿で陳道同が鄭超麟の過去の抗日戦評価について尋ねる場面で、鄭超麟が過ちを認めて頷いたと記し、さらに鄭著「マルクス主義の危機」に言及し、鄭超麟の真摯な為人を公正に評価していることは疑い得ない。実際、陳道同は、釈放後、上海に住んだ鄭超麟

宅をしばしば訪れていた（熊安東「祭陳道同」〔『十月評論』二〇一五年第二・三期〕参照）。今、王老も著者陳道同自身も世を去った。一部不正確な部分もあるが、当事者の資格でなされた歴史証言として本編は貴重である。訳者は昨秋（二〇一五年秋）、『世界史リブレット　人　陳独秀』（山川出版社）を刊行し、また現在、『陳独秀文集』全三巻を友人たちと翻訳中で、平凡社東洋文庫から今夏以降刊行予定であるが、この過程で、陳独秀の遺稿『陳独秀最後の論文と書信（陳独秀最後的論文和書信）』を編集刊行した何之瑜の功績と、その過程をつぶさに見ていた陳道同の【本編】が有する資料的価値を再認識するようになった。【本編】がこうして公表されることを泉下の鄭超麟も王凡西ももはや反対することはないであろう。さらに、拙著『魯迅とトロツキー』の中国語版が昨春、台湾人間出版社から出たので、陳道同に送ったところ、令息陳躍宇から同氏がすでに逝去していたことを聞き及び、【本編】を追悼の意味も含め、王凡西の陳其昌論を掲載した本誌にこそ、翻訳公表すべきと考えた次第である。訳者は二〇〇三年に鄭超麟の回憶録を翻訳し『初期中国共産党群像』1・2として平凡社東洋文庫から、さらに上述の『魯迅とトロツキー』を同社から刊行しているが、そこに掲載した陳其昌の写真や陳道同夫妻の写真は陳道同本人から提供を受けた貴重なものである。ここに氏の多くの教示に対する感謝と、深い追悼の意を改めて表する。

二、何之瑜その人そのこと、及びその他

【本編】の主人公、何之瑜（一八九六～一九六〇）は、字は資深、変名に、伍桐、賀松生などがある。陳道同が【本編】でも引く、中共の資料で記録された略伝には次のようにある。

何資深　湖南省安郷県の人。一九一八～一九二五年頃、北京大学文学部に学び、一九二四年以前に北京大学で入党（一九二四年上半期に耿仲康[9]の入党を紹介）。一九二五年北京共青団地区委員会委員。一九二七年秋収蜂起の際、中共湖南省岳陽県委書記、一九二八年、中共第六回大会湖南省代表、六大後、湖南省委組織部長。のち、トロツキー派に加入、一九二九年十二月十五日、陳独秀ら八十一人が「我々の政治意見書」（陳独秀・トロツキー解党派の綱領）を発表したが、何はその中の一人、陳独秀・トロツキー派秘書長となり、同派機関紙『無産者』の出版責任者。一九三一年五月、中国トロツキー派統一大会に参加し、間もなく逮捕され、一九三七年釈放。

抗日戦期間、四川江津九中で教鞭をとり、陳独秀の晩年生活の世話に責を負った。一九四二年陳独秀が病没すると、何は陳独秀の遺著を収集し、出版した。一九四八年、トロツキー派残党の「建党」工作に参加し、トロツキー派「中央委員」となる。一九五二年、人民政府に逮捕され、のち獄中で病死。

（北京地区革命史資料、王效挺・黄文一主編『戦闘在北大的共産党人〔北京大学で戦った共産党人〕』（一九九一年、北京大学出版社））

「解党派」、「残党」といった用語を除けば概ね客観的な記述であるが、若干補足を必要とする。何之瑜は北京の共青団を経て、第一次国共合作期には、中共湖南省湘潭地方委書記として活躍し、毛沢東の「湖南農民運動の視察報告」（一九二七年三月、『毛沢東選集』第一巻所収）ではこの時期の湘潭県の農民運動は成功例として挙げられている。一九二七年六月、毛沢東が中共湖南省委書記となると、何之瑜はその下で組織部長を務め[10]、二人は良好な関係にあったと鄭超麟は記す[11]。

一九二九年、何之瑜は陳独秀らとともにトロツキー派に転じ、一九三一年に国民党に逮捕され、一九三七年に釈放後は、トロツキー派の活動からは一旦離れるが、北京大学同窓会が陳独秀の生活介助を託していたトロツキストの羅漢が一九三九年五月の日本軍による重慶爆撃で亡くなると、その後任を託され、四川江津の国立第九中学で教鞭を執りながら、晩年の陳独秀の生活全般を助けた（なお、何之瑜と名のり始めたのは、一九三七年の出獄後のことで、それ以前は何資深を通称とした）。

一九四二年五月、陳独秀が亡くなると、何之瑜は葬儀を取り仕切り、その遺著を集めた。何之瑜によって一九四八年に書かれた「陳独秀叢著総目」[12]や、この頃の胡適宛書簡[13]からは、何之瑜が陳独秀の遺著を商務印書館から出版しようとしていたことがわかるが、国共内戦終結を伺う緊迫した情勢もあってか、この計画は進まなかった。当時、亡父陳其昌が中共、トロツキスト時代を通じて友人、同志であったこの何之瑜と同居していたのが陳道同であった。同居にいたる経緯が詳らかでないのは残念だが、陳道同は【本編】で、一九四八年十一月、何之瑜が陳独秀の遺稿を、何之瑜、陳道同両人の勤務先、文華映画会社営業部の宿舎に持ちかえり、数日間整理していたと重要な証言をしている。陳独秀最晩年の思想を明らかにする貴重な遺稿集『陳独秀最後の論文と書信』の原稿である。この書も商業出版はかなわず、鄭超麟らトロツキストの友人たちが資金を出し合い、私家版として出版された。また、鄭超麟の何之瑜の本書に関する証言からは、鄭超麟自身も本書編集に、一定程度関与していたことが伺える[14]。さらに、【本編】では、陳道同の弟陳道純も本書編集の手伝いをしていたという（陳道純は新中国での反右派闘争で労働改造対象となり、病死したというが、親族は病死と言う当局の公式記録に不審を抱いているという。後掲注（5）の段躍のインタビュー参照）。

この『陳独秀最後の論文と書信』の何之瑜の後記には一九四八年十一月二十八日と日付が記されており、【本

編】での陳道同の証言と矛盾しないが、本書には奥付はなく、正確な出版日時は不明である。陳道同は上海「解放」（一九四九年五月）の少し前の出版とするが、江田憲治京都大学教授の指摘によれば、『胡適日記』一九四九年二月二十三日の条には本書の読後感として、「陳は晩年、大いに進歩し、すでに「トロツキー派」ではなく、民主自由の道を歩んでいたことを深く喜ぶ[15]」との記載があり、そこから一九四八年末から一九四九年初の出版と想定できる。さらに鄭超麟は本書所収の陳独秀の「SとHへの書簡」について「一九四八年、何之瑜がこの書簡を発表した[16]」と書いていることから、一九四八年末出版の蓋然性が高い。また陳道同は【本編】で、本書の発行部数は二百～三百部程度であったとも証言している。

陳独秀のこの遺稿集を読んだ胡適は、長文の解説を書いた。そして、一九四九年六月、広州の自由中国出版部名で刊行された『陳独秀の最後の見解（陳独秀的最後見解）』は原著から陳独秀のマルクス主義、トロツキズム堅持の色彩の強い書簡四通を除外し、この胡適の長文の解説を序言として付したのであった。

こうして、五四運動の総司令、中共の創立者、近代中国の先導者、陳独秀の晩年の思想を今日私たちが見ることができるのは、何之瑜の功績なのである。この遺稿集の日本語完全版は今夏以降刊行予定の平凡社東洋文庫『陳独秀文集』全三巻の第三巻に、厳密なテクスト校訂を経て訳出、収録されるので参照いただければ幸いである。

さて、本遺稿集出版と前後する時期、何之瑜は鄭超麟らと中国トロツキー派少数派の新組織設立に参画し、一九四九年四月、上海で国際主義労働者党を結成、鄭超麟、王凡西とともに五名の指導部の一人に選出された（ちなみに多数派は前年、彭述之を中心に中国革命共産党を結成し、香港に指導部を移していた）。このため、何之瑜は一九五二年十二月の中共によるトロツキスト一斉検挙で逮捕、投獄され、一九六〇年、かつての中共湖南省委時代の同志、毛沢東が建国した人民共和国の監獄で獄死するのであるが、陳道同が【本編】で明らかにしようとしたのは、

何之瑜がなぜ陳独秀の遺稿集を編み、なぜ再び中国トロツキー派運動に参加したかということである。陳道同の結論は、何之瑜の目的がともに中国トロツキー派と中共を和解させることにあった、とその後の歴史の推移からすれば一見、荒唐無稽とすら思える地点に落ち着く。この結論の妥当性について、当時の情勢や何之瑜と中共、毛沢東らとの歴史的関係なども再検討する必要があり、また、王凡西、鄭超麟らには中共から「和解」の働きかけがあったことも事実であって、にわかには判断を下しかねるが、少なくとも一つの仮説として受け止めることは可能であろう。あるいは何之瑜はかつての毛沢東との親交を過大評価していたのかもしれない。

さらに、副次的ながら陳道同は中国映画史の一面を証言している。【本編】には呉性栽[17]が作った文華映画会社〔文華影片公司〕や清華映画会社〔清華影片公司〕が登場する。呉性栽はのちに香港に渡るが、実は香港に移った中国トロツキストも、香港映画界と関係が深く、王凡西はシナリオを書いて生計を立てていたし、同じくトロツキストの楼国華（一九〇六～一九九五。魯迅との交流があった中共派の著名な作家、楼適夷のいとこでもある）が香港で経営していた美麗華写真館は香港映画界の人たちの多くが利用してしたという。また【本編】には金山[18]、張瑞芳[19]、賀姉妹[20]など俳優・映画監督の名前も出てくるが、この時代の映画界と中共やトロツキー派との関係も今後の研究テーマとして興味深い点である。

以下、歴史の当事者としての陳道同の何之瑜及びその周辺に関する貴重な証言を、若干の事実誤認を注で指摘しつつ、日本の読者の便に供する次第である。文中（　）は原注、〔　〕は訳注である。長い訳注は文末に置いた。

なお、【本編】の後に、陳道同のオリジナル原稿の写真を付し、世界の研究者に供する。ウェブ版で参照願いたい。

注

（1）【訳者はしがき】では原則として敬称を省略する。

（2）中国の私的経営による金融業。

（3）東呉大学は十九世紀末上海と蘇州に開学されたアメリカ系のミッションスクールに淵源をもつ。現在の蘇州大学の前身にあたる（この正門には今も孔祥熙の揮毫した碑がある）。陳道同が通ったのは当時上海におかれた東呉大学法律系である。訳者は東呉大学は在蘇州とばかり誤解していたので、この件は二〇〇二年に直接、陳道同から確認を得た。

（4）後掲注（5）にある、『中国研究月報』二〇〇二年四月号（No. 650）掲載の拙訳「陳其昌の死」の「解題」でもこの略歴はすでに紹介してある。

（5）二〇〇二年五月、訳者が上海の陳道同宅で行なったインタビュー（未公刊）や『中国研究月報』二〇〇二年四月号（No. 650）の陳道同著長堀訳「陳其昌の死」（原載は『魯迅研究月刊』二〇〇一年第四期、「陳其昌之死」）、長堀ほか訳『初期中国共産党群像』1・2（平凡社東洋文庫、二〇〇三年）、長堀著『魯迅とトロツキー』（平凡社二〇一一年）、長堀編訳インタビュー「中国トロツキストの命運―人民共和国に暮らして―」付解説（『中国21』第十四号、愛知大学現代中国学会編、二〇〇二年十月）、さらに『科学民主論壇』二〇一五年第一期（同年六月）段躍採訪手記「陳道同口述生命史」などによる。なお、上記『中国研究月報』拙訳中（三四頁左段）、「上海孤島期」の訳注に誤りがあるので遅まきながら以下のように訂正する。「孤島〔日本占領下の上海を指す〕」→「孤島〔日本軍は一九三七年八月、上海に侵攻し占領するが、共同租界の一部とフランス租界には侵攻せず、日本軍に包囲されたこの地区は「孤島」と称された（一九三七年十一月十二日～一九四一年十二月七日）。太平洋戦争勃発にともない、日本軍はこの地区にも侵攻して「孤島」期は終った〕」

（6）一九四六年八月、呉性栽（後掲注（17）参照）が上海で設立した映画会社。黄佐臨、柯霊らが監督として在籍した。一九四七～四九年には『夜店』、『艶陽天』など、一九四九年五月の上海解放後は『腐食』、『我這一輩子』などの作品

がある。一九五一年に上海聯合電影制片廠に編入された。夏衍著阿部幸夫訳『上海解放―夏衍自伝　終章』（東方書店、二〇一四年）も参照のこと。

（7）これも訳者の陳道同へのインタビューの際の証言である。

（8）前掲注（5）の「中国トロツキストの命運―人民共和国に暮らして―」参照。

（9）耿仲康（一八九八～一九七二）は、一九二八年離党、記者として抗日戦に貢献、新中国では寧夏回族自治区政協委員などを務めた。

（10）これは『中国共産党組織史資料匯編　領導機構沿革和成員名録』（中共中央党校出版社、一九九五年）で確認できるが、『戦闘在北大的共産党人』が記す一九二七年の秋収暴動の際の岳陽県委書記という肩書きや、一九二八年夏にモスクワで開催された中共第六回大会参加後に湖南省委組織部長となったという記録は同書では確認できない。なお、『中国共産党組織史資料』第二巻（中）（中共党史出版社、二〇〇〇年）で確認できる何之瑜の中共内での地位は、湖南省委常務委員、宣伝部組織局（長）、民運部部長などである。

（11）鄭超麟「記何資深」（『懐旧集』東方出版社、一九九五年に収録。のち『史事与回憶　鄭超麟晩年文選』全三巻、香港天地図書公司、一九九八年、の第二巻に収録）参照。

（12）何之瑜「独秀先生病逝始末記」（一九四二）及びその「後記」（一九四二～一九四三年執筆）、「陳独秀叢著総目」（一九四七～一九四八年執筆）（『陳独秀評論選編』下、河南人民出版社、一九八二年、所収）参照。

（13）中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究会編『胡適来往書信選』（香港中華書局、一九八三年）所収。

（14）注（11）に同じ。

（15）『胡適日記全集』（台北：聯経出版事業、二〇〇四年）。

（16）鄭超麟「海峡両岸両位世紀老人的通信」（『陳独秀研究動態』（11）、一九九七年五月）

（17）一九〇四～一九七九。著名な映画事業家。一九三〇年代、聯華制片印刷公司の理事長。一九三五年、モスクワ国際映画祭で栄誉賞を受賞した『漁火曲』も聯華の製作作品である。一九四六年、上海で文華影片公司、一九四八年、北

京で清華影片公司設立。一九四八年に香港に移住。龍馬影業公司を主宰した。不明な点も多い映画人である。吉川龍生著「『武訓伝』批判とはなんだったのか」（本誌第七号、二〇一四年）も参照。

（18）一九一一～一九八二。著名な俳優、演出家、映画監督。一九三二年中共入党。一九三〇年代半ばから映画界に進出。代表作に『狂歓之夜』、『風暴』など。張瑞芳とは一時期、結婚していた。

（19）一九一八～二〇一二。著名な女性俳優。一九三八年中共入党。一九四〇年代から映画界で活躍。一九六三年の『李双双』では電影百花賞最優秀女優賞。全国政協委員なども歴任した。なお、映画関係の注は『中国電影大辞典』（上海辞書出版社、一九九五年）によっている。

（20）この姉妹については、上記辞典でも詳細未詳。

【本編】

第一のこと　『陳独秀最後の論文と書信』の編集出版

「陳独秀研究」は国内外の学者の数十年にわたる努力を経て、現在に至り、まだ壮観とまではいかないが、少なくともすでに様になってきているとは言える。これを「陳学」と呼ぶ人もいる。すでに大なり小なりの特定課題ができている。古い課題が完全に解明されないうちに新しい課題が続いて出てくる。「陳独秀晩年の思想」は出来立ての新課題のようである。陳独秀の「晩年の思想」を研究するには、その「最後の意見」は不可欠である。後者は実際前者の主要部分である。この課題は新しいとはいえ、極めて重要である。理屈は単純だと思う。「最後」が欠けたら、「以前」も完璧ではありえず、この偉大な先達の生涯にピリオドを打つことができないということだ。

この「最後の意見」の淵源はどこか。多くの学者はみな、それは何之瑜が編集出版した『陳独秀最後の論文と書信』という書だということを知っている。この書は全部で四編の論文と十通の書信を収録している。論文四編のうち、発表済みのものは二編のみで、書信十通はといえば、すべてトロツキー派内か、トロツキー派関係者に宛てたもので、当然ながら、おおやけに発表されることはなかったものだ。しかし、研究者によっては、たとえば一九九九年出版の『陳独秀大伝[1]』の作者のように、「最後の見解」が一九四九年六月、香港出版〔奥付によれば香港印刷、広州自由中国社出版部発行〕の胡適序のついた『陳独秀最後の見解（論文と書信）』、別名『陳独秀最後の民主〔政

治〕に対する見解』という書に淵源すると考えるものもいる。『大伝』の作者の紹介によれば、胡適序のついたこの書は、全部で六通の書信と四編の論文を収録し、後ろに注で「何之瑜が収集、編集した一九四八年出版の『陳独秀最後の論文と書信』は本書より四通多くの陳独秀書信を収録する」と言う。

私は何之瑜による本書編集、出版過程をこの眼で見ていたので、『陳独秀大伝』中の言い方が適切でないことを証明できる。不適切な部分は二箇所ある。

一、作者〔任建樹〕も何之瑜編本の出版が先で、胡適序本の出版が後であることを知っているのだから、正確な言い方は胡適序本の方が何之瑜編本よりも四通「少なく収録した」とすべきであって、何之瑜編本が胡適序本より、四通「多く収録した」、ではない。

二、何之瑜がこの本を編集、出版したのには彼の目的があり、文章を選ぶときにも彼の基準があった。何之瑜が〔「民主政治に対する」とは言わず〕「最後」とだけした意図は明白である。その動機と目的は読者自身に考えさせようとしたのである。胡適がこの書を再版したとき、四通を削除し、その上書名を変え、陳独秀の「最後の見解」を民主問題にだけ限定した。胡適がこのようにして削除を施し、版本を改めたのには、胡適がほかに動機と目的とを持っていたことを物語っている。だから、大多数の学者の見方は正しい。つまり、「最後の見解」あるいは「最後の意見」は何之瑜編本に淵源するのであって、胡適序本にではない。このほか、「最後の意見」という一語は「最後の見解」と比べると、もちろん本書の主題としてより妥当であるようだ。

学者はみな、『陳独秀最後の論文と書信』という小冊子を重視しているが、この書の編者、何之瑜についてこれまで相応には重要視してこなかったようだ。『陳独秀大伝』の作者は、上述のごとく、何之瑜がいかなる人物かも知らない。しかし、豊富な資料で有名な一九八九年出版の『陳独秀伝』[2]下冊の作者唐宝林は書中、何度も何之瑜に

触れ、何之瑜が何資深（前者が名で、後者が号）であることを知っているにしても、何が陳独秀晩年の生活の面倒を見、遺著の収集、出版したことだけに注目しているにすぎない。書中、賞揚の言葉が多いとはいえ、深い点まで行き届いているとはどうしても思えない。何之瑜の政治傾向についてははっきりしないのである。私はいつも思うのだが、もしこの書がなければ、もしこれらの論文と書信が世に出ていなかったら、「陳独秀研究」はどんな状況になっていただろうか、陳独秀本人もどのような像になっていただろか、と。だから、私は何之瑜の功績が歴史に埋もれてしまってはならないと考えるのだ。

鄭超麟は一九九一年に「何資深を記す〔記何資深〕」（一九九五年東方出版社から出た『懐旧集』に収録）という一文を書いている。今、その文中から何之瑜の政治的経歴に関わる部分を以下に抄録する。

党校での仕事を終えると[3]、李維漢は何資深を湘潭県委書記として派遣した。……大革命高揚期には、湖南各県の工作では湘潭県がもっともうまくやった。……毛沢東は湖南省委書記で、何資深は組織部長だった……何資深と毛沢東は非常にうまく協力した……秋収暴動[4]のあと、毛沢東は長沙を離れ、省委員会書記は何資深に譲られた[5]。一九二八年末、何資深は湖南省代表団の資格でモスクワでの中共第六回大会に行った……中央は何資深を地下の上海総工会秘書長にした……彼は私たちと数ヶ月間接触し……正式に反対派に参加した……そのため中央によって〔中共を〕除名された……左派反対派では、陳独秀は何資深を秘書長とし、……陳独秀とはとてもうまく協力し……（トロツキー派統一の過程では）何資深はおおくの優れたアイディアを出し、おかげで運動がうまく進むようになった。しかし、何自身は将来指導機関で何らかの地位を占めようという考えはなく、……一九三七年八月十九日に出獄すると……何は獄中の陳独秀と会い、陳独秀は何と私たち夫婦を安徽の汪孟

鄒の家に行かせてしばらく留まるよう手配した……一九三八年元旦、何は湖南へ向け出発した……『新華日報』が陳独秀を漢奸だと中傷すると、何は長沙から武漢に行き（原注一）、その後さらに四川に行って陳独秀の面倒を見、そのまま陳独秀の葬儀を取り仕切り、遺稿を集めた……他の人だったら陳独秀の死後の諸事をこれほどうまく処理できなかっただろう……

煩を厭わず、こうして抄録したのは、『陳独秀最後の論文と書信』の背景として研究の参考に供しうればと希望するからである。

一九四七年末、私は文華映画会社営業部の〔上海〕孟徳蘭路（現江陰路）への業務移転にともない、宿舎がその裏の建物の狭い中二階の部屋になったが、何之瑜は私よりも前にすでにそこに住んでいた。初めて会ってみて、何之瑜が私の家庭状況にとても詳しいと感じた。なんと、何はかつて私の父と同じく北京大学生で、二人ともほとんど同時期の〔中共〕入党で、それからまたほとんど同時期にトロツキー派に転じて、ほとんど同時期に除名されたのだった。その後、私の父のトロツキー派との関係は一九四二年に犠牲なるまでずっと続いた。何之瑜は一九三一年に〔国民党政府に〕逮捕され、一九三七年に出獄後、陳独秀に付き添って、遠く四川まで行き、トロツキー派との関係は断たれた。一九三八年末、私の父が四川に赴いて、陳独秀に情報を知らせたとき、何が接待係りとなった。だから、世代的には何は父の世代の御仁ということになる。残念ながら、私は当時二十歳そこそこで、極めて幼稚であり、歴史上のことであれ、学識であれ、知識は極めて乏しかった。さもなければ、何とは二年間一緒に暮らしたのだから、私は何からもっと多くのことを知りえたはずである。

最初の年、私が見るに何之瑜はのんびりしていた。一九四六年に上海に来てからは、何は彭述之の〔中国トロツ

キー派〕多数派[6]とは絶縁していた（のちになって初めて、私は陳独秀が「彭君とノッポ〔尹寛[7]のこと〕」とはたとえ、意見を同じくしても、決してともに行動しはしない[8]」という言葉を残していたのを知った）。少数派とは、個人的な交友を保っていた。普段は上海在住の二人の大学生とだけ、よく行き来していたが、そのほかには、数人の学生が冬休みと夏休みにときとして〔帰省の際〕上海を通るついでに何を訪問した。これ以外に交友関係があったかどうか、私は覚えていない。何は引きこもってほとんど外出せず、隠者のような生活だった。当時の何の唯一の趣味は新聞だった。文華映画会社が講読していた数部の新聞の、毎日最初の読者は決まって何であった。

一九四八年十一月のある日、何は一包みの文書（原注二）をよそから持ちかえり、部屋に一脚だけあった四角いテーブルに並べて、数日間整理していた。あとで何が私に言うには、これらはみな陳独秀が書いた文章と書信の原稿で、上海解放前に急いで印刷して出版しなければならないということだった。

どうして、上海解放前に急いで出版しなければならないのか。何が言うに、情勢は中共の勝利が決定的で、中共が来たら、陳独秀の書いたものは出版のチャンスがなくなるからだ[9]、と。

どうしてこれらの文章と書信を世に出版しなければならないのか。何が言うに、陳独秀を蹂躙させないためだ、と。

私の質問と何の回答はその場の言葉通りではないが、言葉の意図するところはっきりと覚えている。ひとことで言い換えれば、何の本書出版の目的は、ほかでもなく陳独秀を守るためであり、それは同時に陳独秀というあの「人の受け売りや、豆腐や白菜がどうのという痛くもかゆくもないことは絶対に言わない。この上なく正確な言葉、この上なく間違った言葉は言いたいものだが、可もなく不可もない言葉は絶対に言いたくない[10]」という公正で磊落な人格の尊厳を守ることであった。現在すでに多くの学者は、陳独秀が五、六十年前に発表した「最後の意見」の

中に、誤り以外に、間違いなく「本質的な見解」、「優れた予見」、「いくつかの意見は後世の人の評価と将来の事実の検証を待つ価値がある」（唐宝林の語[11]）ことを発見している。たとえ「最後の意見」を否定する人でも、「長くさびしい思索の中で、陳独秀の姿はいつも私の心中を徘徊している。私はもとより、最後の意見に同意しないが、……陳独秀最後の意見は正しいか、間違いかに関わりなく、なんと言ってもわれわれの時代思想のいくつかの中心に触れるものであることは認めざるを得ない」（王凡西の語[12]）と言っている。

世紀の変わり目に立って、往事を振り返り、一冊の薄く小さな本を目にするとき、思いがけず、現代人は数限りない深い思考にいざなわれる。この点を考えると、本書のために苦労した何之瑜をどうして忘れることができようか。

ここでちょっと言っておくべき意義ある事柄がある。

鄭超麟の「何資深を記す」という文中に、次の一段がある。

> 何は陳独秀が晩年に文字学研究の余暇に書いた数編の政治的文章と書信を一冊の小冊子に編集し、資金を募って出版した。これはいいことであり、私は何を支持し、出版のために募金もした。何は私にも署名して共同編集にするよう言ったが、私は拒否した。文字学の著は私にはわからなかったし、何が編集する際、私に相談しないでもよかったのだから、……。どうしてこれらの政治的文章が完全に編集し終わって印刷に付されるときになって初めて、私に署名せよと言うのか。これも何資深が友人を遇するある種の手段であった。

この本の十数通の書信を読んだことのある人は、鄭超麟がなぜ署名を拒否したのか理解するのは難しくない[13]。だ

が、深く考えさせられるのはつぎのような問題である。何之瑜はどうして鄭超麟に署名をするよう言い出したのか。鄭超麟は誤って何之瑜を批判した可能性はないのか、ということである。

何之瑜がこの本を編集していたとき、私に原稿から清書するといった類の仕事を手伝わせた。しかし、私は昼は仕事、夜は通学と忙しく、そこで、ちょうど失業中の上の弟[14]を紹介し、通して半月ほど、毎日昼に文華に来て何の手伝いをさせた。この弟は反右派闘争のとき、不幸にも死んだ[15]が、もし今日まで生きていたら、さらに詳しい状況について教えてくれただろう。

本書が出版されたときには、上海解放はすでに迫っていた。本書は三十二開[16]の冊子だったと記憶する。とても薄くて数十頁に過ぎなかったが、印刷と装丁の質はよかった。部数は多くなく、大体二、三百部だった。胡適は最終的に大陸を離れるとき、上海から飛行機で飛び立った。何之瑜は急いで胡適に一冊送った。聞くところでは胡適はほかでもなく、この飛行中、本書のために序を書き[17]、本書から四通の書信を削除して香港〔広州〕自由中国出版社に渡したそうだ。これが胡適序本の由来である。胡適には目的があった。しかし、陳独秀「最後の意見」を広く伝播させた功績が胡適にもあることを認めぬわけにはいかない。これはもちろん、私の現在の見方である。

（原注一）ここで鄭超麟は何之瑜が武漢に赴いた理由を説明していない。唐宝林ははっきりと言っている。「何之瑜は徐特立[18]に付き添っていわゆる「日特漢奸〔日本の特務漢奸〕[19]」事件を調停しに武漢に行った」と。私の記憶では、別の言い方もある。徐特立が「日特漢奸」事件調停のために何之瑜を呼んだのだ、と。

（原注二）何之瑜の学生の一人が外灘〔上海市黄浦江西岸の、旧共同租界の一帯。西洋建築が林立し、観光名所となっている〕にある中国銀行の地下室に貸し金庫を借りており、何之瑜が鍵を持っていたので、私は以前ずっと、

陳独秀の遺稿はここに保管されていたのだと思ってきた。一昨年初めて知ったことだが、何之瑜は四川から木箱を一つ持ちかえり、そこに陳独秀の遺稿を入れておいたのである。この木箱は当時、来熏閣という古書画店の階上に置かれていた。

第二のこと　初志を改め、再度トロツキー派に参加する

一九四九年五月、上海は解放された。九月、私は上海を離れ、北京に転学した。一九五二年末に、学生生活を終えるその日まで、私は北京で三年四ヵ月を過ごした。この期間、私は鄭超麟に手紙を書いたことはなかったが、それは解放の少し前、私は正式に鄭にトロツキー派脱退を表明していたからである。私は〔鄭超麟との〕友誼を重視したが、解放初期というあの歴史的条件のもとでは、政治第一としなければならず、鄭との連絡を中断したのは、必然的な振る舞いであった。もちろん、鄭が私に手紙をくれるはずなど、なおのことなかった。

しかし、私と何之瑜との関係はまったく違った。三年四ヵ月の間、通信連絡は、途絶えることはなかった。手紙で私は、生活や学習状況ばかりでなく、〔中共に提出する〕自伝の執筆経過まで書いた。一九五一年夏休み、私が上海に戻ったのは、親族に会うため以外の主な目的は、何資深と会って、彼からどのように政治的経歴を〔中共に〕説明したらいいか、指南してもらおうと思ったからにほかならない。私がなんら憚るところなく、敢えてそうしようと思ったのは、何との付き合いの中で、まったくもって、次のような印象を持ったことが原因である。何は陳独秀に付き従うこと長年にして、とうの昔にトロツキー派組織とは関係を中断しており、何と鄭超麟らの関係は純粋に個人間の友人関係であると見えたということである。

私の何に対するこうした判断は、自伝を提出して間もなく、北京の公安局指導者との会話の中で反駁された。その指導者は私に、何資深は依然としてトロツキー派組織と関係があるばかりか、まだ指導者の一人でもあると言うのだった。こうした反駁に、私はもちろん無言で対したが、心中、深い霧が立ちこめたようで、半信半疑だった。

この疑問は三十年間、心中にあり続けたが、一九八〇年代初め、『双山回憶録』[20]を読んで初めてわかったことには、当時公安局のあの指導者の反駁は正しかったのである。王凡西はこの本の中でこう書いている。

> 一九四九年四月二七、八日、全国代表大会を開催し、……指導機関を選出した（全部で五人、鄭超麟、資深、林煥華、元「翌社」の兪碩遺同志と私である）。我々の党名は、「中国国際主義労働者党」に確定した。[21]

これで私の心中の大きな疑問は解決したが、また小さな疑問が生れたのである。何資深はトロツキー派のこの新党で指導機関の一員であった。これ以前のトロツキー派少数派でもやはり指導者だったのか、と。私が知っている以前の少数派の指導者は全部で四人、その中に何はいなかったのだ。

それからさらに十年が過ぎ、一九九一年になると、鄭超麟が何資深の四弟と学生の要請で「何資深を記す」を書いた。私は読後初めてわかった。何資深の政治的地位についての当時の私の判断は、半ばは正しく、半ばは間違っていたのだ。正しかった半面とは、何が一九三七年国民党の獄から出獄後、一九四八年までの期間は確かにトロツキー派との関係が中断しており、トロツキー派に属する人ではなかったということだ。一九四九年初め、新党で中央委員になったのは、何の二度目のトロツキー派加入に違いないのである。「何資深を記す」には以下のような記述がある。

一九四六年晩夏、何資深は四川から上海にやってきた。私は以前のように彼を友人と見なして遇した。……我々には当時、組織があった。会議のとき、もし何がその場に居合わせれば、参加して意見を言うようにさせた。しかし、何はいつも疑心暗鬼で、我々の背後関係をひどく心配していた。……何は当時、心の底で、中共中央が我々に投げかけた、中国トロツキー派は国民党のスパイだという中傷を信じていたのだ。何は証拠を探そうといつでもどこでも注意を払っていた。

前で引用した鄭超麟が『陳独秀最後の論文と書信』に共同で署名するのを拒否したという一段の、最後の文が「これもまた何資深が友人を遇するある種の手段であった」である。

一九四八年末、『陳独秀最後の論文と書信』を編集するまでは、鄭超麟は相変わらず何資深を「友人」の列に加えていたことがわかる。続けて「何資深を記す」は具体的に何資深の二度目のトロツキー派加入の時期と経過を説明する。

一九四八年末と一九四九年初、我々は第一回全国代表大会を召集し、正式に建党することを決定した。何資深を準備工作に招請することも決定した。何資深は応諾した。……この大会は一九四九年四月十九日にやっと開催にこぎつけ、……中央委員会を選出した。何資深も当選した。

私はこのことにまったく気づいていなかった。「一九四八年末と一九四九年初」はちょうど上海の学生運動が高揚した時期であった。私は非常に忙しく、昼間はいつも遅刻早退、ひどいときはサボり、夜はしょっちゅう帰宅し

なかった。何資深ともたださっと顔を合わせるだけで、話しをする機会はさらに少なかった。一九四九年初のある日、何資深は私のところに来て、真剣に話しをした。「君がトロツキー派につくなら、私は反対しない。君が中共につくならそれにも反対しない。しかし、両方の舟に乗ろうとしてはいけない」と。このときの言葉で私はトロツキー派をやめる決心を固めた。この決意を何に伝えたとき、何は反対しなかった。その後の私たち二人の関係から見るに、何は私のこの決意に賛成だったようだ。もちろん、ほとんど同時期に何自身が鄭超麟の「招請」を「いれて、準備工作に参加」し、〔トロツキー派〕中央委員に当選したとは私はまったく知らなかった。かつての〔トロツキー派〕統一大会の際、何が優れたアイディアを出し、おかげで運動がうまく進むようになったが、「何自身は将来指導機関で何らかの地位を占めようという考えはなかった」ことを思い出すべきである。

昔の謎は解けたが、何の為人のため、私にはよく理解できない事が少なくなるどころか、逆に増えてしまった。私は老境に入ってからずっと、わが生涯の苦労に満ちた体験をどう総括、評価すべきか考えてきた。私は幸いにも青年時代に、一九四六～一九四九年の疾風怒濤のごとき時代の大転変を経験した。私個人にとっても、重要な時期であった。何資深と同じ部屋で起居をともにし、朝晩一緒に過ごした二年間はまさにこの時期の真っ只中であった。何の私に対する影響を過小評価することはできない。そこで、何の思想を明らかにし、何の行動の動機を明らかにすることは、自ずと私の自分自身に対する要求となったのである。

そして、それにつづいて次のような問題が出てきた。何はなぜ再びトロツキー派に加入しようとしたのか？

一九四九年初めの情勢は、解放軍が長江を渡り、南京はもう解放され、ちょうど江蘇南部、浙江に向け進軍しており、上海はすでに包囲されていた。さらに蔣家の王朝〔蔣介石政権を指す〕はすでに南の広州に逃れ、金持ちたちもみなあわただしく香港、澳門（マカオ）へ引っ越そうとしていた。もし、王凡西の言うトロツキー派建党大会の日時が正

確だとすると、このとき上海市ではもうおそらく、郊外での激戦の砲声が聞こえるようになっていたろう。国内の情勢はすでに明々白々であった。一般市民、村の娘ですら、間違えることなく見極めがついたはずだ。このとき、彭述之らはすでに指導機関を香港に移していた。少数派も指導機関を二つに分割しようとしていた。香港に一部を移し、上海に一部を残すというように。『双山回憶録』は上海に残った鄭超麟を、「ペテロ式の殉教精神を持ち」、「早くから『ローマ』に残る決意をしていた」と賞賛している。

不可解なのは、書中、鄭超麟のみに言及し、何資深に言及していないことである。何資深も確かに「ローマ」に残ったのだが、それは「ペテロ式の殉教精神」から出たことではないということか。書中、何を鄭超麟と同列に置いていない以上、私は何資深にはこうした「精神」がなかったと判断するほかない。そこで、一つの疑問が生れる。彼らの間では香港移転と上海残留問題の議論をめぐって、分岐が生じたのではないか。

さらに注意すべきは、何が晩年行った二つのこと、つまり『陳独秀最後の論文と書信』の編集、出版と再度のトロツキー派加入が、時間的にほぼ同時に進行していたということ、たとえ同時でないとしても少なくとも相前後していたということである。ここまで書いてくると、私は何が『陳独秀最後の論文と書信』を編集しているときの言葉を語らないわけにはいかない。「私は上海解放前に編集を終えて出版しなければならないんだ、中共が来たら、オヤジさん〔陳独秀〕とトロツキー派は、もうそれぞれ別の道を歩んでいたことを、彼ら中共に証明するためにさ」と。これが何がこの本を編集、出版した目的だったが、この目的が達せされたどうかは別問題である。晩年の陳独秀の政治思想について言えば、まだトロツキズムの要素が残っていたし、現代の専門家は、今まさに、あるいはもうすでに的を射た分析をしている。今日、私がこの問題を持ち出したのは、単に何資深には別の解き難い謎があるということを説明したいがためにすぎない。つまり、一方で何は陳独秀を守る目的から陳独秀とトロツキー派

との間に一線を画そうとしたのに、一方では自らトロツキー派に改めて加入したのである。この矛盾をどう解くべきか。

問題は、何はなぜトロツキー派に再度加入したのか、というところに帰結する。

数年来、私は〔鄭超麟の〕「何資深を記す」という文章を何度も読み返し、次第にこの文章が何資深という人のこの矛盾した現象に対して実際、詳細な解答を提示していたことに気づいた。あるいは発見したと言ってもいい。以下は私の読後の実感である。まず、鄭、何二人の関係から話そう。

鄭超麟、何資深は大革命時期〔一九二四～一九二七年の国共合作による国民革命時期を指す〕には、一方〔鄭〕は中央、一方〔何〕は地方にあって、もともと交流はなかった。しかし、中共第六回大会後、大革命敗北の責任問題をめぐって、まず二人は一緒に陳独秀派になった。その後、一緒にトロツキズムを受け入れ、一緒に「無産者社」を組織し、一緒に統一大会に参加し、運悪く一緒に国民党に逮捕されたばかりか、二人は同房に四年の長きにわたって繋がれた。その後、一緒に国民党の獄を出て、一緒に陳独秀が手配した安徽の田舎で休養した。解放前夜にはまた一緒にトロツキー派新党を準備、建党し、最後には一九五二年末、〔中共政権によって〕また一緒に逮捕され入獄した。これほど多くの「一緒に」は、あたかも歴史が故意に割り振ったかのようだ。彼ら二人を一緒に結びつけ、同じ役割を担わせたのである。しかし、最後まで二人は「同志」になれなかったばかりか、「友人」にもなれなかった。二人の間の関係は水と火と言わなくとも、少なくとも水と油のように相容れなかった。鄭超麟はそのことを次のように結論付けている。

私と何の二人は協力のしようも、友人になりようもなかった。性格が違ったためである。南京監獄の単身用監房で四年間一緒に生活し、私は何の性格が分かったし、何は私の性格を知った。私は当時から、この人は私と友人、真の意味での友人にはなりようがない、と思っていた。

文中さらに鄭が何資深と三度絶交したことがあると語っている。最初の絶交は一九三八年元旦前後、二回目の「事実上の絶交」というのは、一九五二年秋、三回目は一九五六年六月に起っていて、「これは確定的な絶交で、もはや和解の余地はなかった。……私は許すことができなかったし、時とともに忘れることもできなかった」と言っている。私は読後、三回の絶交はみな原則的問題での意見の分岐に原因があり、これらの問題をちょっと詳しく調べれば、「性格の違い」の内容をより深く理解でき、何資深が再度トロツキー派に加入した謎を解く助けとなるだろうと思った。最初の絶交について、文中こう書かれている。

私は何資深と絶交した。ほかでもなく何が績溪〔安徽省の県〕を離れて湖南に帰ったときである。何は私たち夫婦を一緒に後方〔国民党統治区〕に行くよう言った。私は同意しなかった。一には後方は国民党政権のもとにあり、国民党はいつでも私をまた監禁でき、……二つには、私は後方には家もなく、生活の手段もなく、……さらにはトロツキー派組織は上海にあったからだ。何資深は、その硬い意志で私を圧倒し、屈服させられると踏んで、私たちをあくまで後方に行かせようとした。そこで何と私は大喧嘩をしてそれ以来、話しをしなくなった。一九三八年元旦、何は一人で湖南に戻って行ってしまった。何は別れも告げず、私は見送りもせず、その後は音信も不通となった。

ここから、このときの絶交の原因は、鄭超麟が「トロツキー派組織は上海にある」のであくまで上海に戻ろうとしたためであることがわかる（『九十自述』[22]の一文によれば、「一九四〇年になって、私たちはようやく安徽省南部を離れ、浙江を経由し、寧波海道を通って上海に戻った」とあるが、このときすでに抗日戦は三年を経過していた）。何資深はあくまで抗日戦の後方に行こうとした（一九三八年元旦、安徽南部を離れ、湖南に戻り、同年四月、長沙から武漢に赴いて、陳独秀と会った）。つまり、何が堅持したのは、トロツキー派の中心から離れ、遠く離れた道を行くことであり、二人は各々別の道を進むこととなったのである。

その他の記述をあわせると、二人が道を分かった本当の原因はやはり、抗日戦問題（抗日戦の性質をいかに認識するか、いかに対応するか、など）における分岐にあることが明らかになる。これが「性格の問題」の本当の意味である。鄭超麟はこの点を避けることなく、他の文章中でもこう説明している。

（出獄当日〔一九三七年八月二十九日〕の）夜、私は陳独秀と話しをした。私の抗日戦争に対する考え方〔抗日戦争に進歩的意義を認めず、レーニンの革命的祖国敗北主義に基づき、戦争を国民党に対する内乱に転化することを主張していた〕は、何資深が数日前に陳に会った時にすでに話していて、陳は当然、賛成していなかった。しかし、その夜の話の中では、彼はわざと私の意見をとり上げず、ただ陳自身が獄中ですでに作成していた何条かの大綱を取り出して私に見せただけだった。私はじっくり目を通した。私の方も陳の意見には賛成できなかった。……そのため、この戦争に対する評価と対応の問題はそれ以上話さなかった。

（一九八〇年執筆の「陳独秀とトロツキー派」参照[23]）

また、こうも言っている。

当時、トロツキー派指導機関は当面の抗戦問題に対する態度をめぐって論争をしていた。三種の意見があった。一、抗戦自体に進歩的意義を認め、トロツキー派も国民党の抗戦を支持しすべきというもの。一、抗戦自体に進歩的意義を認め、トロツキー派も独自に抗戦をすべきというもの。一、抗戦は第二次世界大戦の一部であり、レーニンが第一次大戦中の際したように、トロツキー派は戦争の中でプロレタリア社会主義革命を行なう準備をすべきというもの。私は第三の立場に属していた。（一九九〇年執筆の「九十自述」参照[24]）

三種の意見のうち、陳独秀と何資深は第一の意見であった。つぎのようなことである。

我々と陳独秀との間には意見の分岐があっただけでなく、この五年来の戦争で、我々の分岐はより大きくなった。（一九四二年五月執筆の「陳独秀同志追悼[25]」）

政見の違いで二人は進む方向を異とした、とりわけ抗日戦という重大な歴史的関頭においては。そして、彼ら二人、一人は東に行き、もう一人は西に行った。それぞれの見解を携えて、別れたのである。個人間の口論は絶交に至ったが、それはすでにその後の歳月の流れによってすっかり薄められ、まったく意味を失ってしまったことがわかる。歴史は後の時代の者が書くものだが、前時代の人の行為の是非を議論するには、当時の情勢や条件に基づくよりほかはないだけでなく、のちに発生した数々の偶然の要素を総合しなければならない。人はだれもこの点がう

まくできないのである。たとえば、鄭超麟が抗日戦問題において堅持した「革命的〔祖国〕敗北主義」は、人々が一貫して非難するものだ。しかし、この主張はレーニンが第一次世界大戦中、堅持したものであり、さらにはコミンテルンが第二次世界大戦勃発前にも堅持していたのではなかったか。これも当時「コミンテルン内部で流行していた[26]」主張だったことがわかる。革命者は、当然、自己の信念を固く守り、自己の判断に基づいて自己の行動を決定すべきである。革命者は当然この信念を真理と見なし、行動を正しいと見なす。俗に言う「堅固」とはそうした意味である。「参加することに意義がある」というのは、その対極である。ここから判断するに、鄭、何ふたりの分岐は、単に政見の分岐、思惟モデル（思惟セット[27]とも言う）の違いすぎない。さらに、このときの陳独秀はおそらく、すでに自分と鄭超麟との間の分岐が調和しがたいことを知っており。一番いい対処法は、ほかでもなく「あえて言及しない」ことだったのである。次のような推測は成り立つであろうか。陳独秀は鄭超麟夫婦を安徽績溪に行くよう手配して、何資深から再度説得させる意志があったと。

ふたりの当時の政見の分岐については、歴史がとっくに結論を出している。抗日戦争の正確な路線は疑いなく毛沢東の路線であった。すなわち、「擁蔣〔介石〕抗日」の一方、統一戦線中での独立自主の堅持である。この路線は鄭超麟が紹介しているトロツキー派の三種の意見のうち、第一と第二の意見の中間である。もし、第一の意見が半ば正しく、第二の意見も半ば正しいとすると、第三の意見はまったく正しくないということになる。鄭超麟は晩年のあるとき、私がこの件を持ち出し、当時の第三の意見は間違いだったと言うと、頷いてそれを認めた。一九九八年末、私は鄭が一九八五年十二月に書いた「マルクス主義の危機」という一文を読んだが、末尾は次のように書かれていた。

私は連戦連敗の老兵であり、敗北の戦場から幸運にも生き延びてきた。古人曰く「敗軍の将、勇を言うべからず」と。しかし、敗軍の将も結局は度重なる敗北から得た有益な教訓を、未来の戦士に寄与することができるというものだ。[28]

鄭の一貫した為人となりと合わせて、私はこの言葉は真摯なものだと思う。ふたりの「第一の絶交」についてはここまでとする。

二人がひとたび別れてから八年。再会したとき、抗日戦は勝利し、国内外はまったく別の様相だった。新たな歴史の大いなる背景のもとでは、かつて「最初の絶交」に至った原因はすでに重要性を失っていた。しかし、情勢は決まって、絶えず新たな問題を提起し、人々に思考し、態度表明することを促す。政見の分岐はつねに、情勢の変化に従い、流れる水のように絶えることはない。さらに、人それぞれにみな自分の思惟モデルを持っており、それは一旦成立すると改めようとしても難しい。それは、家庭、教育、経歴などの客観的影響によって決まるだけでなく、遺伝子もその形成に寄与するのかもしれない。私は何資深と知り合ってまもなく、何と上海トロツキー派指導者たちとの間では、政治的見解が異なることを感じとった。

ここまで書いてくると、振り返り見て、一九二九年に陳独秀がトロツキーの主張を受け入れるとき、態度を保留したことにひとこと触れないわけにはいかない。

最後の革命権力の問題（プロレタリア独裁か否か）では、陳独秀を説得することはできなかった。つまり、

陳独秀が完全に納得することはなかったということだ。劉仁静が帰国したあと、そのほかの〔トロツキー派の〕三派と話し合いを持っていた時期にさえ、陳独秀はトロツキーの権力の性質に関する主張を完全には受け入れていなかった。（一九八〇年執筆の〔鄭超麟著〕「陳独秀とトロツキー派」参照[29]）

似たような言葉は『鄭超麟晩年文選』に十回以上出てくる。鄭超麟がはっきり言っていないのは次のことである。いわゆる未来の革命政権の性質がプロレタリア独裁か否かという問題は、実はほかでもなく、永続革命論を受け入れるかどうかという問題だということである。かつて革命が引き潮で、非現実的な議論をしていた時代に、陳独秀はトロツキーの永続革命論[30]を「完全には受け入れていなかった」とするなら、抗日民族戦争の段階で、陳独秀と永続革命論との距離はどうなったであろうか。

では何資深の未来の革命政権の性質問題についての意見はどうだったのか。文字は書き残していない。鄭超麟の「陳独秀とトロツキー派」の一文中にこうある。「何資深は完全に陳独秀の側に立った[31]」と。この言葉は、陳、何ふたりの行動上の一致を指しているのだが、その後のふたりの行動から見るに、永続革命論という根本的、核心的問題においてもふたりは一致していたのだ。なにがどうあれ、抗日戦を擁護するからには、抗日問題では永続革命論応用の余地はまったくなかった。

数年来、陳独秀に関する資料を読み、『陳独秀最後の意見〔論文〕と書信』を読み返してみて、抗日戦初期の陳独秀は上海トロツキー派との間の論争が激烈で、癇癪を起こすことすらあったとはいうものの、双方とも共通の弱点があったことを感じないわけにはいかない。とりもなおさず、それは双方とも国民党と日本帝国主義を見るだけで、中共が存在する積極的意義を重んぜず、認識していないということである。この一点はまさにトロツキー派

（陳独秀を含む）の致命傷であった。まさに中共の存在というこの事実が、戦争の性質と前途を変えたのである。当時、もしまじめに中共をちょっと研究することができ、公開の宣伝からばかりでなく、実際の行動上からも研究できたなら、このときの中共がすでに昔のスターリンの管制を受けた中共ではなく、このときの統一戦線は、もはやかつての階級投降政策を繰り返す統一戦線ではなかったことを見てとれないなどということにはならなかったろう。またさらに進んでその革命性を肯定して、その階級性がわかり、中国と世界の未来、前途に積極的な判断が下されただろう。陳独秀はあまりに早く世を去ってしまった。もし、抗日戦の勝利まで生きられたなら、とりわけ中共の全面的勝利のときまで、生きられたなら、中共の性質というこの重大な原則上の問題で、また別の判断を行なったかもしれない。私のこうした推論は、まったく根拠のないことではない。というのは、すでに前例があるのである。それこそ王凡西にほかならない。中共の勝利のあと、王は遠く距離をおいて国内の様々な変化を観察しながら、数年の思索を経て、ついに中共の性質に対する認識に根本的変化が生じたのである。この変化は王が一九五七年に書いた『双山回憶録』の最後の章、「寂寞の中の思索」に見ることができる。おおよそこの文章を読んだ人は作者の執筆の際の沈んだ心情を感じ取ることができる。残念ながらこれは遅きに失した再認識である。もし、二十年前、つまり一九三七年頃、みながこうした認識を持ちえたとしたら、局面はどうなっていただろうか。歴史はまさにこうして永遠に過ちをお供とするのである。

鄭超麟は王凡西が公開で表明したような再認識を持ったことはなかった。しかし、前に引用した「マルクス主義の危機」の締めくくりの言葉は同様の再認識なのである。それも総括的なものである。思うに、こうした再認識は、革命者の公明正大で磊落な性格が求めるところのものである。これはみなわき道にそれた言葉であるが。

何資深はどうか。何は四川の大後方〔国民党統治区〕で抗日戦の全過程を体験したが、抗日戦勝利がもたらした

最大の果実は国民党の勝利ではなく、中共の成熟、成長であり、その成長は蔣介石と拮抗する力を持つまでになったことを感じないわけにはいかなかった。こう言ってもいいかもしれない。何資深がこの事実から感じ取ったことは、孤島〔一九三七年十一月～一九四一年十二月、日本軍によって周囲を包囲占領され孤島状態となった上海共同租界の一部とフランス租界を指す〕[32]にいた鄭超麟よりもずっと多かった、と。そして何が上海に来てからもふたりは依然分岐があり、政見の分岐は依然存在したが、ついに一九五二年秋、「二度目の絶交」となった。このときの「事実上の絶交」の根本的原因は、中共をいかに認識し、中共にいかに対するかという問題にあったと私は理解している。

何資深は理論家ではなく、自分の政治的見解を説明できる文字資料を残さず、ただその話と行動から理解できるだけである。以下のいくつかの事例の大部分は、私自身が経験したことであり、一部は何の学生が私の語ったことである。

抗日戦時、何は四川の江津国立第九中学で歴史の教師を長らくしたことがあるので、教えを受けた学生は全国にいる。私の知る限り、彼ら学生たちは反蔣介石闘争では進歩陣営に立ち、あるものはさらに中共地下党に参加した。解放後、度重なる政治運動では審査を受けたものも少なくないが、誰一人として、何が学生たちにトロツキー派の宣伝をしたなどと言うものはおらず、また何が中共の悪口を言ったなどというものもいなかった。学生たちは、何が講ずる大革命史、とりわけ湖南農民運動について聞くのが一番好きだった。

ある日、酒に酔うと、なんと陳延年、喬年〔陳独秀の長男と次男で、一九二七～八年に、共産党員としてともに国民党に殺害された〕が犠牲になったことに、声を上げて大泣きしたという。

また、往事を語りだすと、中共の指導者たちを「潤之」〔毛沢東の字〕、「恩来」〔周恩来の諱〕とその名を直接呼

び、昔の習慣を改めることはなかった。

解放戦争期間、何は毎日戦況を追い、新聞に昔の戦友の名前が出るたびに、いつもコメントを加えていた。

文華映画会社の宿舎には、金山、張瑞芳が指導する「清華映画会社〔清華影片公司〕」の俳優たちも住んでおり、その中に、賀という姓の二姉妹がいた。上海が解放されたばかりの頃、ふたりそろって何資深を訪ねてきて、身の上を正直に話し、これからどうしたらいいか指示を仰いだ。姉妹は、朱徳の前妻、賀子華の娘であった。何資深は即座にこう言った。ふたりの姉妹の母親は悪人で、朱徳と別れたあと、次の夫とともに、国民党のスパイとなった。羅亦農〔一九〇二～一九二八。初期中共の指導者〕はほかでもなく、この夫妻の密告で逮捕され犠牲となったのだ[33]、と。何資深はそれでもふたりのためにいいアイディアを考えだし、まずだれかに会いに行った。そして、姉妹は何の指示通りにして、恵まれた落ち着き先を見つけることができ、何とは長いこと手紙のやり取りをしていた。

一九四八年のある日、何は言った。「スターリンには誤りがあったが、トロツキーにもあった」と。私はこれを聞いて驚いた。スターリンの誤りについては昔から頭に入っていたが、トロツキーの誤りについては初耳だった。そこで尋ねた。「トロツキーにも誤りがあったのですか」と。何は言った。「誤りがないわけはなかろう。国際問題では誤りがあり、中国問題でもあった」と。私は何が具体的に何を指して誤りだとしたのかは思い出せない。戦争が革命を引き起こすという予言についてだったか。中共に対する「階級投降路線」非難についてだったか。こうした言葉の直接的な結果として、はじめて私の偶像崇拝〔トロツキーに対する崇拝〕が揺らいだ。

解放直後、数人の学生が〔中共〕軍に入る際、みな何の激励を受けたが、その中には何の四弟がいた。

以上のようないくつかの事例を列挙したのは、次の点を説明したいがためにすぎない。私が知っている何資深は壮烈な大革命について、いつも昔を愛惜し、追憶していただけでなく、当時生活をともにした、多くの指導的人物

に対しても終始、懐かしく思っていたということである。何の物言いはいつもいくらか物憂げでいくらか興奮気味だった。こうした感情は、鄭超麟にもないわけではなかったが、表に現れることはほとんどなかった。楼適夷に、鄭超麟に対する「悟りを開いた高僧」という評語があるのを覚えているが、それに引き比べると、何資深の方は世俗、実社会の人であった。

ここまで書いてきて、私はふと思い至った。かつての大革命中の自らの体験は、何資深生涯の中共に対する態度と重要な関係があった。何は湖南農民運動の組織のひとりであり、「毛沢東とうまく協力した」し、運動の初めから勝利、敗北、さらに秋収蜂起までの全過程を体験していた。「何資深を記す」には次のような記載がある。

> 党校での仕事を終えると、李維漢は何資深を湘潭県委書記として派遣した。これは何資深が一番得意の時期であった。大革命高揚期には、湖南各県の工作では湘潭県がもっともうまくやった。これはとりもなおさず何資深の功による、と言う人もいる。

毛沢東の「湖南農民運動の視察報告」も「湘潭県がもっともうまくやった」ことを証言している。

> 湘潭、湘郷、衡山のような県ではほとんどすべての農民が組織され、どんな「片すみ」にいる農民でも、立ち上がらないものはほとんどいない、これが第一級〔である〕[34]。

秋収蜂起では何も指導者の一人であった。一九九一年、北京大学出版社刊の『北大で戦った共産党人』[35]の三十七頁「何資深」の項に次のようにある。

一九二七年の秋収蜂起のとき、中共湖南省岳陽県委書記であった。[36]

「何資深を記す」の記載では、何は中共第六回大会に湖南省代表団団長の資格で大会に報告を提出しているが、そのタイトルは「馬変から牛変へ」であり、「意味は馬日事変[37]から秋収暴動へ、であり、牛とは農民である」。

推察の通り、このような「実社会にある」実践者はどのようにしても現実を「超越」することなどできなかったのである。中国の農村と農民というこのもっとも基本的な「国情」に対する理解は、こうした実践の経験がない人と比べて言うなら、何は疑いなくずっと深かった。それゆえ、のちの「井崗山」、「根拠地」などの目新しい事柄も容易に受け入れられたのであり、農民暴動からたたき上げられた中共にどう向き合うのかという問題で鄭超麟とは異なる態度をとったのである。この点について、私ははっきりとした影響を受けた。

だから、私は長年、次のように推測してきた。何資深が解放間近の特殊な条件のもとで、なんとトロツキー派少数派の建党工作への参加に同意し、中央委員に当選したのには、間違いなく別の目的があったのだ、と。

一九八〇年代初め、私は何資深の教え子と上海で再会した。そのとき、私たちふたりともすでに『双山回憶録』で、何資深が改めてトロツキー派に参加していたことを知っていた。往事を語り始めると、彼女は言った。一、何資深は当時、中国共産党との協力の道を一途に求めていた。二、解放後、何はある民主人士を通じて、自分の経歴書を、〔中共〕上層部に提出していた、と。そこで私もある出来事を思い出した。一九四八年に、私が学生運動中

の苦悶の境遇を何に話したとき、何にこう言った。「我々は中共と協力するべきだ」と。何は次のように私に答えた。「協力するには、まずは少しばかり元手になるようなことが必要だ」と。

また次のようなことも思い出した。一九五一年夏、私は上海に戻った。そのとき、何資深にこう言った。「私はちょっと鄭超麟に会って、中共の勝利という事実を受け入れて、自分の誤りを認めるように忠告したいのですが」と。何は言った。「行ってはいけない、鄭は君の言うことに耳を貸すはずがない。私の言葉だって聞こうとしないのだから」と。さらにこう言った。「北京が人をよこして鄭を訪ねたんだが、彼は会おうとしなった。今、ボールは鄭の側にある」[38]と。

実際、「何資深を記す」では、何資深が再度トロツキー派に加入した目的が、すでに指摘されている。

> 何は私がしょっちゅう中央委員会を招集することに賛成ではなかった。何は私に、すべては何と私の二人で決めれば十分で、中央委員会は一種の形式でしかない、と提起した。私は何が最終的な政策決定者となって、私を通じて彼の主張を執行したいのかと疑った。……それ以来、私は何を訪ねることはしなかった。何もすでに久しく私を訪れることはなかった。私たちふたりは事実上絶交した。

ここに至ると、何の目的ははっきりして来る。トロツキー派をコントロールし、改造して中共との協力を実現するという目的が。

そして、何がなした晩年のふたつのこと『陳独秀最後の論文と書信』の編集出版と再度のトロツキー派加入は同一の目的だったのである。

今日、私はこのことを深く信じて疑わない。

何資深は結局、トロツキー派をコントロールし、改造するという目的を実現することはできなかった（これは何の心からの計画であった）。何はすでに自分の失敗のために極めて大きな代償を払った。何のこの計画は当時から一部の人には知られていたのかもしれない、というのは、何は自分の履歴を書いて新政府の上級機関に提出したことがあったからである。もっとも誰からも相手にされなかったが。結局何の最後は、六十二、三歳で、獄中で病死というものであった。個人としては、これは当然悲劇に属する。もし、「大きな歴史」的角度からよく見れば、何の晩年の行為の中に、まったく積極的な意義が実際なかったとは言えまい。この問題は歴史家の分析に任せよう。

トロツキー派は元来、内部の意見が混乱しており、どの二人ですら意見が完全に一致したことはなかった。これは「党外に党有り、党内に派有り、一貫して此くの如し」という有名な論断に対応している。したがって、トロツキー派内部に分派があったとしても異常な現象というわけではない。多数派と少数派の分立はおくとして、鄭超麟、何之瑜二人の政見上のかくも深刻な分岐は「二つの路線の闘争」ではなかったのか。これは老世代についてのことである。当時のトロツキー派内の青年世代は、各人各様で一枚岩ではなかった。しかし、過去においては、トロツキー派と言えば、みな一色と見なされ、ある指導者の観点が全トロツキー派の政見と見なされた（私はこうした現象は今後次第に改められるだろうと思う）。だから、何資深の個人的悲劇は、中国のトロツキー派史にとっては、その内実を豊富化したのである。少なくともそれは研究領域を広げ、深化させたのである。

二〇〇〇年十二月一日

付録（【訳者はしがき】の二で引用した『戦闘在北大的共産党人』の一節とまったく同じなので、ここでは省略に従う）

訳注

（1）任建樹著、上海人民出版社。ここは六五八頁。

（2）上海人民出版社。

（3）党校とは、中共幹部を養成するための学校で、「記何資深」のこの引用の直前部分によると、何之瑜は一九二六年秋に長沙で党校を運営していたという。

（4）一九二七年九月、秋の収穫期に中共が発動した最初の農民蜂起。湖南省委指導下の蜂起が最大の規模で影響も大きかった。

（5）『中国共産党組織史資料匯編　領導機構沿革和成員名録（増訂本）』（中共中央党校出版社、一九九五年）や『中国共産党組織史資料』全十九冊（中共党史出版社、二〇〇〇年）では、何資深は湘潭地方委員会書記や湖南省委組織部長、さらに省委員会委員、常務委員などの要職を経験したことは記録されているが、省委書記についたという記録はない。

（6）中国トロツキー派は一九四一年に抗日戦の評価をめぐって分裂、防衛主義を主張する彭述之らが多数派となり、祖国敗北主義を主張する鄭超麟、王凡西らは少数派となった。陳独秀は抗日戦に関しては彭述之と見解が近かったが、一九三二年～一九三七年の間、ともに過ごした南京の獄中で、彭述之とは決定的に関係が悪化していた。尹寛は彭述之派であった。抗日戦後、彭述之ら多数派は中国革命共産党を一九四八年に結成、鄭超麟、王凡西、何之瑜ら少数派は中国国際主義労働者党を翌年結成した。

（7）一八九七～一九六七。鄭超麟とともにフランス留学。中共古参党員でトロツキー派に転じた。一九五〇年に中共政権に逮捕され、六五年、病気で出獄するも六七年、死亡。

（8）『陳独秀最後の論文と書信』所収「陳其昌らへの書信（一九三七年十一月二十一日付）」。
（9）陳独秀は、当時の中共の評価では、反革命のトロツキスト、日本から金を貰った漢奸とされていた。中共による「上海解放」は一九四九年五月二十七日。
（10）前掲訳注（8）に同じ。なお、「豆腐」云々の語が、一九三五年六月、国民党に処刑された瞿秋白の絶筆「言わずもがなのこと〔多余的話〕」の結語「中国の豆腐も非常にうまいものだ、世界一だ、お別れだ」を念頭に置いたものだとすると、陳独秀は、八七会議での自らの失脚に重要な役割を演じ、コミンテルンに追随した瞿秋白をここであてこすっている可能性がある。
（11）唐宝林『陳独秀伝　下―従総書記到反対派』（上海人民出版社、一九八九年）二九五頁。
（12）王凡西「従陳独秀的「最後意見」説起」（一九五八年頃作）の冒頭の文。初出不明。ここでは「中文馬克思主義文庫 www.marxists.org」による。
（13）鄭超麟、王凡西を含む、陳独秀の元側近たちも、本書に収録された陳独秀の世界大戦観、抗日戦観や民主主義観に批判的であった。
（14）陳道純のこと。「訳者はしがき」参照。
（15）この弟は、東北で教師をしていたが、反右派闘争の際、迫害されて死んだと訳者は二〇〇二年の著者へのインタビュー時に聞いたが、最近の『科学与民主論壇』二〇一五年第一期（同年六月）掲載の段躍採訪手記「陳道同口述生命史」（陳独秀研究会刊）にもこのことは記されている。
（16）紙の大きさを表す。全紙の三十二分の一の意。
（17）この序言に胡適は「一九四九年四月十四日夜、太平洋上にて」と記している。耿雲志著『胡適年譜』（中華書局、一九八六年）によれば、胡適はこの年、四月六日、上海から米国に船で向かい、二十一日サンフランシスコに着いている。陳道同のこの記述は不正確なようだ。
（18）一八七七～一九六八。湖南第一師範時代の毛沢東の先生。勤工倹学を提唱して自ら仏留学。二七年、中共党員とな

り、新中国でも要職を占めた。

(19) 一九三七年末、スターリン直系の中共指導者、王明、康生がソ連から帰国して、延安に入ると、中共機関紙『解放』紙上で中国トロツキー派は日本から金を貰う「漢奸」だというキャンペーンを始める。翌年三月には同じく『新華日報』が陳独秀の「漢奸問題」を取りあげ始めるが、中共内で陳独秀の復党を検討しようとする勢力は、陳独秀との和解を模索した。結局、王明らはすべての人と抗日で協力できるが、トロツキー派だけは例外だとして、陳独秀の復党問題は霧消した。

(20) 香港周紀行出版、一九七七年初版。増訂本は香港士林図書服務社、一九九四年。北京東方出版社から内部発行本も、二〇〇四年に出ている。邦訳は矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録』柘植書房、一九七九年。

(21) 同右増訂本、三二四頁。

(22) 『懐旧集』所収。邦訳は平凡社東洋文庫『初期中国革命群像』2、六二～六三頁。

(23) 『鄭超麟回憶録』(北京東方出版社、一九九六年、ほか)所収。邦訳は『初期中国共産党群像』2、二二九～二三〇頁)

(24) 邦訳は『初期中国共産党群像』2、六三頁。

(25) 『史事与回憶—鄭超麟晩年文選』全三巻(香港天地図書出版公司、一九九八年)の第一巻所収。六頁。

(26) 『毛沢東選集』第二版(人民出版社、一九九一年)は、陳独秀や中国トロツキー派が日本から金を受け取っていた漢奸だという一九三〇年代後半からのデマ(『毛選』第一版の毛沢東のテクスト及び注はこれを堅持していた)、を撤回し、注を一新した。その際の新注の表現を陳同道は引用している。つまり、中国トロツキー派が漢奸だというのも、祖国敗北主義もともに、コミンテルン内で流行したものだが、真実ではないということを言いたいのであろう。鄭超麟らはもちろん、『毛選』第二版の新注を歓迎したが、それなら、祖国敗北主義も撤回すべきだと、陳同道は事実上、鄭超麟を批判していると考えられる。

(27) 「セット」の原語は「定勢」。心理学の術語、英語では“set”。

(28) 『史事与回憶—鄭超麟晩年文選』第二巻所収。三二六頁。

（29）邦訳は『初期中国共産党群像』2、一四八頁。

（30）ここでの永続革命論の中心的理論は、ブルジョワ的発展が遅れた植民地、半植民地では民主主義的、民族解放的課題をブルジョワジーが解決する力を持たず、それは被抑圧人民とりわけ農民を指導するプロレタリア独裁によるほかないというテーゼ。トロツキー著森田成也訳『永続革命論』（光文社古典新訳文庫、二〇〇八年）等参照。

（31）邦訳は『初期中国共産党群像』2、一八九頁。ただし、この一文がいうのは、永続革命論についてではなく、中国トロツキー派四派の統一問題に関する立場の一致についてである。

（32）【訳者はしがき】の注（5）も参照のこと。

（33）賀子華の裏切りで羅亦農が殺害された事実については『初期中国共産党群像』1、四〇三～四〇四頁参照。その報復として中共は夫の霍家新を暗殺したが、李維漢、鄧小平がこれを主導した。

（34）日本語版『毛沢東選集』（外文出版社一九七二年第二版）第一巻、三五頁。

（35）原題は『戦闘在北大的共産党人』。

（36）【訳者はしがき】の注（10）も参照のこと。

（37）一九二七年五月二十一日、湖南軍連隊長許克祥が長沙で起こした反革命的反乱事件。反乱軍は湖南省総工会、農民協会、国民党湖南党部を封鎖し、共産党、国民党左派の人々を虐殺した。「馬」は21という数字の電報略号。

（38）鄭超麟のフランス勤工倹学、少年共産党時代の友人たちは新中国建国後、鄭超麟を新政権に参加して協力するよう促した。とりわけ中共中央統一戦線工作部長の李維漢は、その職位を活用して、施復亮（施存統）を通じ、鄭超麟との和解の道を探ったが、鄭超麟はこの申し出を断った。Zheng Chaolin, translated by G.Benton, *An Oppositionist for Life: Memoirs of Zheng Chao- lin*, Humanity Press,New Jersey, 1997. の Editor's Introductin, xvii 頁。

何之瑜晚年两件事

第一件事：编辑出版《陈独秀最后论文和书信》

"陈独秀研究"经国内外学者数十年的努力，到了现在，虽不能说是已蔚为大观，但至少可谓已初具规模。有人称之为"陈学"。它已形成或大或小的若干专题。老专题尚未吃透，新专题跟着而来。"陈独秀的晚年思想"似乎是形成不久的一个新专题。研究他的"晚年思想"，离不开他的"最后意见"。后者实是前者的焦点。这个专题虽新，却极重要。我认为道理很简单：缺了"最后"，"以前"也就不会完美，也就不能为这位伟大的先行者的一生划上句号。

这个"最后意见"源自何处？大多数学者都知道它出自何之瑜编辑出版的《陈独秀最后论文和书信》一书，这本书共收论文四篇，书信十封。论文四篇中曾公开发表的仅半篇，而书信十封都是寄给托派中人，或与托派有关系的人。自然也是不曾公开发表过的。但是也有个别研究者，如 1999 年出版的《陈独秀大传》作者，却认为"最后见解"源自 1949 年 6 月出版于香港并有胡适作序的《陈独秀的最后见解（论文和书信）》，又名《陈独秀最后对民主的见解》一书。据《大传》作者介绍，胡适作序的这本书共收六封书信和四篇论文，后面有个注解称："由何之瑜搜集、编辑，于 1948 年出版的《陈独秀最后论文和书信》较本书多收陈独秀的四篇通信。"

我亲眼目睹何之瑜编辑、出版本书的经过，所以可以证明：《陈独秀大传》中的说法是不妥的。不妥之处有二：

一、 作者也知道何编本出版在前，胡序本出版在后，所以正确的说法应该是胡序本较何编本"少收"了四封信；而不是何编本较胡序本"多收"了四封信。

二、 何之瑜编辑出版此书自有他的目的，选文时自有他的标准。他之只称"最后"，用意是明白的：动机和目的由读者自己去思考。胡适再版此书删去四封信，且改了书名，把陈独秀的"最后见解"局限于民主问题上。胡适这样既删且改的版本说明他另有动机和目的。所以，大多数学者的看法是对的："最后见解"或"最后意见"应该源自何编本，而不是源自胡序本。此外，似乎"最后意见"一词，较"最后见解"，自当更贴切本书的主题。

学者都重视《陈独秀最后论文和书信》这本小册子，但对此书的编者何之瑜似乎都未予以应有的重视。《陈独秀大传》的作者不知何之瑜为何许人也已如上述。但是即使以资料丰富著称、出版于 1989 年的《陈独秀传》下册的作者唐宝林在书中虽多次提到何之瑜，知道何之瑜即何资深（前者是名，后者为号），也仅着眼于他对陈独秀晚年活的照顾和遗著的收集出版。书中言语虽多褒扬，但总觉不涉深处，对何之瑜的政治态度似乎也不甚了了。我常想假如没有这本书，假如这些论文和书信不曾公诸于世，"陈独秀研究"将是怎样的场面？陈独秀本人又将是怎样的面目？所以，我认为何之瑜的功绩不应被历史埋没。

郑超麟在 1991 年曾写《记何资深》一文（1995 年收入东方出版社出版的《怀旧集》中），现将文中有关何之瑜的政治经历，摘录如下：

> "党校结束后，李维汉派何资深去做湘潭县委书记。……在大革命高潮时，湖南各县的工作，要算湘潭县做得最好。……毛泽东做湖南省委书记，何资深做组织部长……何资深与毛泽东合作得很好……秋收暴动后，毛泽东离开长沙，省委书记就交给何资深做了。……1928 年末，何资深是以湖南省代表团团长的身份去莫斯科参加六大的……中央派何资深做地下的上海总工会秘书长……他同我们接触几个月……正式参加反对派……因此被中央开除……在左派反对派中……陈独秀任命何资深为秘书长，……同陈独秀合作得很好……（在托派统一过程中）何资深出了很多好的主意，使得运动能够顺利进行。可是他自己并不想在未来的领导机关中占据一个什么位置……1937 年 8 月 19 日出狱……他在狱中见了陈独秀，陈独秀安排他和我们夫妇去安徽汪孟邹家暂住……1938 年元旦他动身回湖南去……《新华日报》污蔑陈独秀为汉奸后，他就从长沙来到武汉（注 1），以后又去四川照顾陈独秀，一直到陈独秀死后料理后事，搜集遗稿……换一个人，陈独秀身后的事情不会做得这样好……"

不厌其烦，抄录如上，希望能作为《陈独秀最后论文和书信》的一个背景材料供研究参考。

1947 年底，我随文华影片公司营业部迁至孟德兰路（今江阴路）办公，宿舍就在后面楼上的亭子间，何之瑜已先我住在这里了。初次接触，我就感到他对我的家庭情况很熟悉。原来当年他与我父亲都是北大学生，两人些不多的时候入的党，以后又差不多的时候转向托派，差不多的时候被开除出党。后来，父亲的托派关系一直保持到 1942 年牺牲之时。何之瑜于 1931 年被捕，1937 年出狱后，即追随陈独秀于左右，远去四川，中断了托派的组织关系。1938 年底，父亲赴川给陈独秀送信时，他负责接待。所以论辈份，他是我世伯。可惜当时我年方二十，极为幼稚，不论史事还是学识，都知之甚少。否则的话，与他相处二年间，从他那里我当知道更多东西。

第一年，我见他很是清闲。1946 年来上海后，对于彭述之的多数派他是绝不交往的。（后来，我方知陈独秀有"关于老彭和长子，即使意见相同，我也暂不与之共事"之语。）对于少数派，他也仅保持私人情谊。平时，只有两位在沪读大学的学生与他常有来往，以及每逢寒假暑假偶有几位学生途经上海时来探望他。除此之外，我不记得是否还有别的交往关系。他深居简出，过的是隐士般的生活。当时他唯一的爱好是报纸。文华公司订的几份报纸，每天的第一个读者总是他。

1948 年 11 月间，有一天他从外面带回一包文件（注 2），摊在室内唯一的方桌上，整理了几天。后来，他告诉我这些都是陈独秀写的文章和信件的底稿，他必须赶在上海解放之前，将它们印刷出版出来。

为什么必须赶在上海解放之前出版呢？他说，看形势，中共的胜利是肯定的了。中共来了之后，陈独秀写的东西就可能没有机会出版了。

为什么必须将这些文章书信出版于世呢？他说，为了陈独秀不被错题。

我问的与他回答的都不是原话，但话语精神我记得很确切。用一句话来概括，他出版这本书的目的，就是为了保护陈独秀，也就是保护陈独秀他那"绝对不说人云亦云，豆腐白菜不痛不痒的话。我愿意说极正确的话，也愿意说极错误的话，绝对不愿说不错又不对的话"的光明磊落的人格尊严。现在，很多学者已从陈独秀发表于五、六十年以前的"最后意见"中除谬误之外，发现了确有"深刻之见"，"英明预见"，"有些意见的价值还有待后人去评说，有待将来的事实去检验"（唐宝林语）；即使否定"最后意见"的人也表示"在长期寂寞思索中，陈独秀的影子常在我心中徘徊。我根本不同意他的最后意见，……但我不能不承认，陈独秀的最后意见不管正确与谬误，总触及了我们时代思想的几个中心问题。"（王凡西语）。

站在世纪之交的门槛上，回顾往事，看到了一本薄薄的小书，竟然引发了当代人的无数的深沉思考。想起这一点，又怎能忘记为此书付出辛苦的何之瑜？

有一件事，在这里说说不是没有意义的。

郑超麟在《记何资深》一文中有如下一段记载：

"他把陈独秀晚年在文学学研究余暇写的几篇政治文章

和书信编成一本小册子，集资出版。这也是好事，我支持他，也替出版券了捐。他要我署名和他合编，我却拒绝了。文学学等著作我不懂，他编时可以不算我商量……。为什么这些政治文章要等他完全编好了付印时，才要我署名呢？这也是何资深对待朋友的一种手段。"

读过这本书中十封信的人，都不难理解郑超麟为什么会拒绝署名。但令人深思的却是这样一个问题：何之瑜为什么竟会提出要郑超麟联合署名呢？会不会是郑超麟错怪了何之瑜？

何之瑜编这本书的时候，本要我帮他做些誊清抄写之类的事务工作。可是我忙，白天上班，夜晚上学，于是介绍正失业在家的大弟，每天白天来文华帮助他，一共约半个月。我大弟不幸死于反右运动中，如果活到今天，将能提供更多的情况。

此书出版时，距离上海的解放已不远了。记得它是小三十二开的本子。薄薄的，不过数十页，印刷及装订的质量都不好。数量不多，大概二、三百本。胡适最后飞离大陆时，是从上海起飞的。何之瑜赶去送他一册。据说胡适就是在这次飞行旅途中，为此书写了序言，再托三四封信交香港自由中国出版社出版。这就是胡序本的由来。胡适有他的目的：但也不能不承认，在扩大传播陈独秀"最后意见"这方面，胡适也是有功绩的。这自然是我今天的看法。

注 1：这里，郑超麟没有说明何之瑜此次赴武汉的目的。唐宝林说得明白："何之瑜陪徐特立到武汉调解所谓'日特汉奸'事件。"我

的记忆中还有另一种说法：徐特立邀何之瑜去武汉调解所谓"日特汉奸"事件。皆记存疑。

注 2：他的一位学生在外滩中国银行地下室租有一只保险柜，何之瑜有一把钥匙，所以我过去一直认为陈独秀遗稿藏于其中。前年方知，何之瑜从四川带回了一只木箱，内藏遗稿。这只木箱当年存放在一家名叫来熙阁的古书画铺楼上。

第二件事：一改初衷 再度参加托派

1949 年 5 月上海解放。9 月，我离开上海，转学北京；直到 1952 年底中断了我的学生生涯那一日为止，在京已有三年四个月了。在这期间，我没有给郑超麟写过信，因为解放前不久我正式向他申明了退出托派。我虽重感情，但在解放初那样的历史条件下，不可能不把政治放在第一位，中断与他的联系当是必然之举。他自然更不会写信给我。

但是我与何资深的关系却完全不同。三年四个月的时间内二人的通信联系从未间断。信中我不但写了生活学习情况，甚至还写了写作自传的经过。1951 年暑假我回上海，除探亲外，另一个主要目的就是想会见何资深，从他那里得到些如何交待政历的指导。我之敢于毫无顾忌地这样做，完全是因为从与他交往中得到这样的印象：他追随陈独秀多年，早已中断了与托派组织关系；他与郑超麟等人，纯粹是个人间的朋友关系。

我对他的这个判断在我交上自传后不久，在一次与北京市公安局领

导人谈话中，遭到他的批驳。他告诉我，何资深不仅仍与托派有组织关系，而且还是领导人之一。对这样的批驳，我当然无言以对，但心中却是迷雾一团，半信又半疑。

这个疑问存于心中三十年，一直到八十年代初，看到了《双山回忆录》后，方始明白，当年公安局那位领导人对我的批驳是对的。王凡西在书中这样写："在一九四九年四月二十七、八日，举行全国代表大会……产生了领导机关（共五人：郑超麟、资深、林焕华、原属'翌社'的俞硕造同志和我）。我们的党名确定为'中国国际主义工人党'"。此后我心中的大疑问解决了。但又产生了一个小疑问：何资深在托派这个新党中是领导机关人员，在此前的托派少数派中是否也是领导人呢？我所知道的此前少数派领导人共四人，其中并没有他。

又过了十年，到了 1991 年，郑超麟应何资深四弟及学生之请，写了《记何资深》。我读后方始明白：当年我对何资深政治身份的判断是对了一半，错了一半。对的一半是：他自 1937 年走出国民党监狱起，直到 1948 年底这段时间内，确实中断了托派的组织关系，不属于托派中人。1949 年初在新党中出任中央委员，应是他第二次参加托派。《记何资深》中有如下记载：

"1946 年夏末，何资深由四川来上海，我仍旧把他当作老朋友招待他。……我们当时已有组织。开会时，如果他在旁，也让他参加表示意见。但他总是疑神疑鬼，很注意我们的社会关系。……他那个时候内心深处相信了中央给我们的污蔑，说中国托派是国民党的特务。他处处留心寻找证据。"

前面引用了郑超麟在担绝何资深要他在《陈独秀最后论文和书信》上联合署名的一段话，其中最后一句话是："这也是何资深对待朋友的一种手段。"

可见，一直到 1948 年底，《陈独秀最后论文与书信》编订时，郑超麟仍把何资深放在"朋友"之列。接下去该文具体说明何资深第二次参加托派的时间和经过：

> "1948 年底和 1949 年初，我们决定召集一次全国代表大会，建立一个正式的党。决定邀请何资深参加筹备工作。何资深答应了。……这个大会一直到 1949 年 4 月 17 日（注：《双山回忆录》说是 4 月 27、8 日）才开成。……选出中央委员会。何资深也当选。"

我对此毫无察觉。"1948 年底和 1949 年初"，正是上海学运高潮时期。我很忙。白天常常迟到早退，甚至旷工；晚上常常夜不归宿。与何资深也只是匆匆照一面。与他谈话聊天的机会更少。1949 年初某一日。何资深找我认真地谈了一次话。他说："你跟托派走，我不反对；你跟中共走我也不反对。但你千万不可脚踏两条船。"正是这次谈话促使我下决心退出托派。当我把这个决心告诉他时，他并不反对。从此后的二人关系看，他对我的这个决心似乎是赞同的。当然，我并不知道几乎在同一时候他自己却"答应"了郑超麟的"邀请"，"参加筹建工作"，并当选为中央委员。要知道当年统一大会时，他出了很好的主意，使得运动能够顺利进行，"可是他并不想在未来的领导机关中占据一个什么位置。"

旧的诞团解开了，但他为人令我识不透的事情不是少了，而是多了。我自进入老境后，一直思索着怎样来论定自己一生的风雨经历。我有幸在青年时代经历了 1946 年～1949 年疾风骤雨式的时代大转变，就我个人而言，这也是一个重要时期。与何资深共居一室，朝夕相处的两年，正处在这个时期的中心。他对我影响是不能估估的。所以，弄清他的思想，明瞭他的行为动机，自然地成了我给自己提出的一个要求。

于是，这样的问题随之而来：他为什么要再度参加托派？

1949 年初的形势是：解放军已渡过长江，南京已解放，正向苏南浙江进军，上海已处在包围之中。且不论蒋家皇朝已离迹广州，就是一般有钱人家，也都忙于迁居港澳。如果王凡西说的托派建党大会的日期正确的话，此时的上海市恐怕已能听到知区激战的炮火声了。国内形势已是明明白白。普通的市民村姑当都能判断无误。此时，彭述之他们已将领导机关迁到香港。少数派的领导机关也将一分为二：一部分迁往香港，一部分留在上海。《双山回忆录》称留在上海的郑超麟有着"彼得使徒式的殉道精神"，"早就下了决心留在'罗马'了"。

令人不解的是：书中只提郑超麟，而未提到何资深，何资深确也是留在'罗马'的，但是不是也出于"彼得使徒式的殉道精神"？书中既然不把他与郑超麟并列，我只能认为何资深并不具有这样的"精神"。于是我产生了一个疑问，莫非他们在讨论去向问题的时候有过分歧？

更加值得注意的是：他晚年做的两件事，即编印《陈独秀最后论文

与书信》和再度参加托派，在时间上几乎是同时进行的，即使不是同时进行至少也是前后衔接。写到这里，我不得不说出他当年编《陈独秀最后论文与书信》时说的一句话："我必须赶在上海解放前编好出版，为的是中共来后，向他们证明老先生已与托派各走各的道。"这是他编印此书的目的，而这个目的是否达到则是另一回事。至于陈独秀晚年政治思想中还留有多少托洛茨基主义成份，当代专家正在或者已经作了中肯的分析。今天我提起这件事，只是想说明何资深身上另一个难解的谜：一方面他出于保护的目的想划清陈独秀与托派的界线，另一方面，自己却重新参加托派。如何解开这个矛盾呢？

问题归结为：他为什么要再度参加托派？

几年来，我反复读了《记何资深》一文，渐渐地感觉到或者说发现了此文对何资深身上的这个矛盾现象，其实已作了详尽的答案提示。下面是我的一些读后体会。先说说郑、何二人的关系。

郑超麟、何资深二人在大革命期间，一在中央，一在地方，本不交往。只是六大之后，在大革命失败的责任问题上，先是一起成了陈独秀派。此后，一起接受托洛茨基主义，一起组织"无产者社"，一起参加"统一大会"，不仅一起遭国民党逮捕，而且两人关在一间牢房达四年之久。以后一起走出国民党监狱，一起由陈独秀安排在安徽乡间休养。解放前夕又一起筹建托派新党，最后又一起在 1952 年底被捕入狱。这样多的"一起"，似乎是历史的有意安排，把他们扭结在一起，承担同一个角色。可是直到最终，二人非但不能成为"同志"，

也未能成为"朋友"。其间的关系，不说是水火，至少也是水油不相容。郑超麟对此下了如下的结论：

> "我和他二人无法合作，也无法做朋友，因为性格不同。在南京监狱单人间同住四年，我认识了他的性格，他也认识了我的性格。我当时就想，这个人无法同我做朋友，真正意义下的朋友。"

文中还谈到了他前后曾与何资深绝交过三次。第一次发生在 1938 年元旦前后；第二次称作"事实上的绝交"发生在 1952 年秋；第三次发生在 1956 年 6 月，称作"这是确定的绝交，再没有和解之余地了。……我不会原谅，也不会淡忘。"我读后感觉到三次绝交都源于原则问题上的意见分歧，这一议这些问题，可以深入地理解"性格不同"一词的内涵，对于理解何资深再度参加托派之谜有帮助。关于第一次绝交文中是这样说的：

> "我同何资深绝交了。就在他离开绩溪回湖南的时候。他要我们夫妇跟他一起到后方去。我不同意。因为一来后方在国民党政权底下，国民党随时可以再把我关起来，……二来我在后方没有家，无法生活，……何况托派组织在上海。何资深以为他的坚强意志可以压倒我，使我屈服，坚持要我们到后方去。于是他和我大吵一场，从此二人不说话。1938 年元旦他一个人动身回湖南去了。他不告别，我也不送行，去后也不通音讯。"

由此可知此次绝交的原因是郑超麟因"托派组织在上海"而坚持要回上海（根据《九十自述》一文所载："直至 1940 年，我们才离开皖南，经过浙江，由宁波海道回到上海"。此时，抗战已进行了三年），

何资深坚持要到抗战后方去（1938 年元旦离开皖南回湖南，同年 4 月，从长沙赴武汉与陈独秀相会）。也就是说他坚持的是离开托派中心而远去的道路，两人分道扬镳了。

结合其他文字记载，可以明白。造成二人分道扬镳的真正原因还是在抗战问题上（如何认识抗战的性质，如何对待它，等等）的分歧。这是“性格不同”的真正含义。郑超麟并不回避这一点，他在其他文章中作了说明，如：

“（出狱当天）晚上我同陈独秀谈了话。我对于抗战的意见，何资深前天看见他时已经同他说了，他自然不赞成；但这晚谈话中他有意不提我的意见，只将他在狱中已经拟好的几条提纲拿给我看。我仔细看了，我也不赞成他的意见。……因此关于此次战争的估计和态度的问题，我们就谈不下去了。”（见 1980 年写的《陈独秀与托派》）。

又如：

“当时托派领导机关争论对当前抗战的态度问题。有三种意见。一种以为抗战本身有进步意义，我们应当支持国民党的抗战；一种以为抗战本身有进步意义，我们应当独立抗战；一种以为抗战是第二次大战的组成部分，我们应当准备在战争中举行社会主义革命，像列宁在第一次世界大战中那样。我属于第三种意见。”（见写于 1990 年的《九十自述》）

在三种意见中，陈独秀与何资深当属第一种意见。又如：

“我们与他之间有意见分歧，而且这五年战争以来，我们的

分歧更大了。”（见写于 1942 年 5 月的《悼陈独秀同志》）

政见不同导致各人的走向不同，特别在抗战这样重大的历史关头。于是他们两个人一个东进，一个西去。带着各自的见解和信念分手了。个人间的争吵，以致“绝交”，已被此后的岁月冲得很淡很淡，显得没有了一点意义。历史是后人写的，议论前人行为的是非。只能根据当时的形势和条件，还要综合许许多多后来发生的偶然因素。人都做不到这一点。比方说，郑超麟在抗日问题上所坚持的“革命失败主义”历来为今人所诟病。可是此项主张不仅为列宁在第一次世界大战中所坚持，而且第三国际在第二次世界大战爆发前不是也曾坚持过吗？可见这也是当年“在第三国际内部流行”着的一种主张。一个革命者自当坚守自己的信念，根据自己的判断决定自己的行动。他当然把此信念看作是真理，把行动视为正确。常言的“坚强”，即此之谓。今人称：“重在参与”，对极。由此判断郑、何二人的分歧，只是政见分歧，是思维模式（又称“思维定势”）的不同。另外，此时的陈独秀恐怕已经明白他与郑超麟之间的分歧已难以调和，最好的处理办法就是“有意不提”。是否可作这样的猜想：陈独秀也安排郑超麟夫妇去安徽绩溪，有由何资深再作一次劝说之意？

对于他们当年的政见分歧，历史早已作了结论。抗日战争的正确路线无疑是毛泽东的路线：即一面是“拥蒋抗日”，一面是坚持统一路线中的独立自主。这条路线似乎是郑超麟介绍的托派三种意见中第一与第二意见的中和。如果说第一种意见对了一半，第二种意见也对了一半的话，第三种意见则一点都不对。在郑超麟晚年的时候，有次

我和他谈起这件事，我说当年这个第三种意见是错的，他点头认可。1998 年底，我看到了他写于 1985 年 12 月的《马克思主义的危机》一文，结束语是这样写的：

我是一个屡战屡败的老兵，从失败的战场上幸存下来。

古人说：“败军之将不可言勇”。可是败军之将毕竟能够从屡次失败中获得有益的教训，贡献于未来的战士。

结合他的一贯为人，我认为这段话是真诚的。有关他们的“第一次绝交”，就说到这里。

二人一别八年。再见时，抗战已经胜利，国内外另是一番景象。在新的历史大背景下，当年导致“第一次绝交”的原因，已失去份量。然而形势总是不断地提出新的问题让人去思考，去表态。政见分歧总是伴随形势的变化就水似的不舍不断。另外，由于每个人都有自己的思维模式，它一旦形成，要改亦难。它不但取决于家庭，教育，经历等客观影响，也许遗传基因也参与它的形成。我认识何资深不久，就感觉到他与上海托派诸领袖在政治见解上是不相同的。

写到这里，不得不回过头来说说 1929 年陈独秀在接受托洛茨基主张时的保留态度：

最后，到了革命政权问题上（是不是无产阶级专政）陈独秀没有被说服，或没有完全被说服。刘仁静回国后，甚至同其他三派谈判的期间，陈独秀也没有完全接受托洛茨基关于政权性质的意见。（见写于 1980 年的《陈独秀与托派》）

类似的话，在《郑超麟晚年文集》出现了不下十次。郑超麟没有明白说出来的是：所谓未来的革命政权性质是不是无产阶级专政的问题，实际上就是接受不接受不断革命论的问题。在当年革命低潮的消沈时期，陈独秀“没有完全接受托洛茨基”的不断革命论，那么到了抗日民族战争阶段，陈独秀与不断革命论之间的距离又将如何呢？

那么何资深在未来革命政权性质问题上的意见又如何？没有文字留下来。郑超麟在《陈独秀与托派》一文中有句话：“何资深完全站在陈独秀一边。”这句话虽是指二人行动上的一致，但从以后的行动上看，在对待不断革命论这个根本的，核心的问题上，二人是一致的。无论如何，既然拥护抗日，那么在抗日问题上就绝无应用不断革命论的余地。

年来读了一些有关陈独秀的资料，又温读了《陈独秀最后意见与书信》，不由得感到抗战初期陈独秀与上海托派间的争论是然激烈，甚至动了肝火，但双方都有一个共同的弱点，就是把目光仅局限在国民党和日本帝国主义身上，都没有重视、没有认识到中共存在的积极意义。这一点正是中国托派（包括陈独秀）的致命伤。正是中共存在这一事实，改变了战争的性质和前途。当年如果能认真地研究一下中共，不仅从公开的宣传上，而且从实际的行动上去研究，就不致于看不到此时的中共已非当年受制于斯大林的中共；此时的统一战线已非重覆当年阶级投降政策的统一战线；也就进而会肯定它的革命性，明白它的阶级性，也就会对中国和世界的未来前途作出积极的判断。陈独秀去世过早，如能活到抗战胜利，尤其能活到中共全面胜利之时，

在中共性质这一重大原则问题上，他也许会作出另样的判断。我这样的推想并非毫无根据，因为已经有了一个例子，他就是王凡西。中共胜利之后，他远距离地观察着国内的种种变化，经过几年思索，终于对中共性质的认识有了根本性的转变。这个转变见于他写于 1957 年的《双山回忆录》最后一章《在寂寞中思索》。凡是读过这篇文章的人都会感受到作者下笔时的沉重心情。可惜这是迟到的反思，如果二十年前，即 1937 年左右，大家都能有这样的认识，局面又将如何？历史就是这样永远需要错误作伴。

郑超麟不曾有过如王凡西公开表达的反思。但上面引述的《马克思主义的危机》的结束语两样也是反思，而且是总结性的反思。我想，这样的反思是革命者光明磊落性格所要求的。这些都是题外话。

何资深呢？他在四川大后方经历了抗战的全过程。他不会不感受到抗战胜利所带来的最大果实并非国民党的胜利，而是中共成熟了，成长了，已成长为一支足以与蒋介石抗衡的力量。也许可以这样说，何资深从这个事实中所得到的感受，要比身处孤岛的郑超麟要多。于是他来上海后，二人依然有分歧，改见分歧依然存在。终于在 1952 年秋发生了“第二次绝交”。此次“事实上的绝交”的根本原因我认为在于如何认识及如何对待中共这个问题上。

何资深不是理论家，不曾留下可以说明自己政治见解的文字资料，只能从他的谈话和行动来理解他。下面几个事例大部分是我亲历，小部分是他的学生告诉我的：

抗战时他曾在四川江津国立九中任历史课教师多年，学生遍布全

国。据我所知，他们在反蒋斗争中都站在进步行列，有些人还参加了中共地下党。解放后，在历次政治运动中受到审查的不在少数，但无一人说得出他向学生们宣传过什么托派思想，也无一人说得出他说过中共什么坏话。学生们最爱听他讲大革命史；特别是湖南的农民运动。

某日酒酣，竟为证实，乔年的牺牲放声大哭。

讲起往事，对中共领袖人物仍“润之”、“恩来”地直呼其名，不改当年习惯。

解放战争期间，他逐日追踪战事进展，每当报上出现当年好友名字时，常加点评。

文华影片公司的宿舍内，还住有金山，张瑞芳领导的“清华影片公司”的一批演员，内中有贺绿汀姊妹二人。上海刚刚解放她们就双双来找何资深，坦言身世，要求指点今后方向。她们是劳动的前要树子华的女儿。何资深当即告诉她们：母亲是坏人，她离开朱德后，跟后夫一起做了国民党特务。罗亦农就是由于他们的告密而被捕牺牲的。何资深还为她们出了很好的主意，先去找谁。后来，她们照着他的指点去做，都得到了很好的归宿，并与他保持了很长一段时间的书信联系。

1948 年某日，他说：“斯大林有错误，托洛茨基也有错误。”我听了惊然。留在入脑已久，后者则是第一次听到。遂问：“托洛茨基也有错误？”他说：“怎么没有错误？在国际问题上有错误，在中国问题上也有错误。”我记不起他具体所指了。莫非是指战争引发革命的预言？对中共“阶级投降路线”的责难？这句话的直接结果是第一

次动摇了我对偶像的崇拜。

解放初，有几位学生参军时都得到了他的鼓励，其中有他四弟。

列举以上几则事例，只是为了说明一点：我所知道的何资深，不仅对壮烈的大革命经常地抚背追忆，而且对当年相处过的诸多领袖人物也始终留有眷恋之情。言谈中常有几分惆怅、几分兴奋。此类情愫郑超麟不是没有，而是很少流露。记得陆定宇对郑超麟有“得道高僧”的评语，相比之下，何资深则是入世的人。

写到这里，我不觉想到：当年在大革命中的亲身经历与何资深终生对中共的态度有着重要的关系。他是湖南农民运动的组织者之一，“湘毛泽东合作得很好”，经历了从发动到胜利，到失败，再到秋收起义的全过程。《记何资深》中有如下记载：

> “党校结束后，李维汉派何资深去做湘潭县委书记。这是何资深最得意的时候。……有人说，在大革命高潮时，湖南各县的工作，要算湘潭县做得最好。这就要归功于何资深了。”

毛泽东《湖南农民运动考察报告》也证实是“湘潭县做得最好”：

> “像湘潭、湘乡，宿山这样的县，差不多所有的农民都组织起来了。几乎没有哪一只‘角落里’的农民没有起来，这是第一等。”

秋收起义他也是领导人之一。1991 年北京大学出版社《战斗在北大的共产党人》中，第 34 页<何资深>项下：“1927 年秋收起义时，任中共湖南省岳阳县委书记。”

《记何资深》的记载，他在六大上以湖南省代表团团长的身份向、

大会提交的报告，题目叫《从马变到牛变》，“意思是说从马日事变到秋收暴动，牛者农民也”。

可以想见，有着如此“入世”实践的人，是无论如何“超越”不了现实的。对于中国农村和农民这一最基本“国情”的理解，比起没有经过此种实践的人来说，他无疑要深刻许多；从而也使他在后来比较容易接受“井冈山”、“根据地”等等新鲜事了；也使他和郑超麟在如何对待以农民暴动起家的中共这一问题上有着不同的态度。这一点我是清楚地感受到的。

所以，我在很长一段时间内有个猜想：何资深在临近解放那样的特殊条件下，竟然答应参加托派小数派的建党工作，并当选为中央委员，必定另有目的。

八十年代初期，我与何资深的一位学生重逢于上海。此时，我们都已从《双山回忆录》中知道了何资深重新参加了托派。谈起往事，她告诉我：一、何资深当年一心想找一条与中国共产党合作的道路；二、解放后，他曾通过一位民主人士向上转交过自传。同时我也想起一件事：1948 年间我谈起学生运动中的苦闷处境时曾对他说：“我们应该与中共合作。”他是这样回答我的：“要合作，自己先要有点本钱。”

又想起：1951 年夏，我回上海。曾对何资深说“我想见见郑超麟，劝他接受中共胜利的事实，承认自己的错误。”他说：“你不要去，他不会听你的。连我的话，他都不听。”还告诉我：“北京曾派人来找他，他不肯见。现在关键就在他身上。”

其实，《记何资深》一文有段话已经点出何资深再度参加托派的

目的了：

"他不赞成我经常召集中央委员会。他向我建议，凡事由他和我二人决定就够了。中央委员会只能作为一种形式。我不接受他的建议。我怀疑他要做最后决策人，通过我去执行他的主张。……从此我不再去找他。他已经很久不来找我。我们二人事实上绝了交。"

至此，他的目的已很清楚：控制和改造托派实现他与中共合作的目的。

于是可知。他晚年所做的两件事，编印《陈独秀最后论文和书信》与再度参加托派二者是为了同一个目的。

今天，我对此已深信不疑。

何资深最终未能实现他控制与改造托派的目的（这是他一厢情愿的计划）。他已为他的失败付出了惨重的代价。他的这个目的当年可能已为某些人所知，因为他曾写过自传上送，却没有得到赏识。他最后的结局是：六十二、三岁左右病死狱中。就个人来说，这当属悲剧。如果从"大历史"的角度来观察的话，他晚年的行为中难道真的没有一点积极的意义？这个问题，让历史学家去分析吧。

托派自来内部意见纷陈，没有两个人的意见是完全一致的。这应了"党外有党，党内有派，历来如此"这个著名论断。所以托派内部有派就不是异常现象了。多数派与少数派之分姑且不说，郑、何二人在政见上如此严重的分歧岂不也是"两条路线斗争"？这是就老一代说的。至于当年托派中的青年一代，更是人各百异，决非铁板一块。

可是在过去一提托派，就视作人人一色，把某个领导人的个人观点当作整个托派的政见（我相信这种现象今后会逐步改变的）。所以，何资深的个人悲剧对于中国的托派史来说，是丰富了它的内容。它至少扩展了研究的层面宽度和深度。

附　录

何资深　湖南省安乡县人。约于 1918—1925 年在北京大学文学院学习，1924 年前在北大入党（1924 年上半年介绍取仲庶入党）。1925 年曾任北京团地委委员。

1927 年秋收起义时，任中共湖南省岳阳县委书记，1928 年为湖南省出席中共"六大"代表，"六大"后任湖南省委组织部长。后参加托派，1929 年 12 月 15 日陈独秀等 81 人发表"我们的政治意见书"（托陈取消派纲领），何是其中之一，并任托陈取消派秘书长，负责出版该派机关刊物《无产者》。1931 年 5 月参加中国托派统一大会。不久被捕，1937 年获释。

抗战期间在四川江津九中教书，负责照顾陈独秀的晚年生活。1942 年陈病逝后，何负责收集出版陈独秀遗著。1948 年参加托派余党的"建党"工作，任托派"中央委员"。1952 年被人民政府逮捕，后病死狱中。

原载《战斗在北大的共产党人》

1991 年，北京大学出版社

2000. 12. 5.